ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』

石　川　栄　作

徳島大学教養部紀要（外国語・外国文学）第１巻　別刷
１９９０年３月
Journal of Foreign Languages and Literature
College of General Education
University of Tokushima
Volume I
March 1990

徳島大学教養部紀要
(外国語・外国文学)
第1巻 1990

ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』

石 川 栄 作

Die Nibelungensagen und das Nibelungenlied

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Die Nibelungensagen sind im Norden reichlich überliefert. Mit der Hilfe der nordischen Sagen hat Andreas Heusler einen Stammbaum des Nibelungenlieds aufgestellt. Hier möchten wir, die nordischen Überlieferungen ordnend, seine Theorie behandeln, um die Vorgeschichte des Nibelungenlieds zu erhellen und damit die Eigenschaft des Epos aufzufassen.

Die sogenannte ältere Edda, die man von der jüngeren Edda unterscheidet, enthält 19 Nibelungensagen. Diese Lieder geben uns aber keinen zusammenhängenden Umriß: denn die ältere Edda ist eine Sammlung der verschiedenartigen Lieder. Es fehlt hier teilweise auch an einigen wichtigen Stücken. Diese fehlenden Teile ergänzt doch ein anderes Denkmal: Völsungasaga. Diese gibt uns noch dazu einen ganzen Umriß der nordischen Überlieferung. Die Eigenschaft des Werks besteht nicht nur in dem nordisch-mythischen Einschlag der Sagen, sondern auch in der innerlichen Vertiefung der Brünhildsage. Brünhild spielt hier im Norden eine wichtigere Rolle als im Süden.

In der späteren Überlieferung Thidrekssaga dagegen ist Brünhild nicht mehr so wichtig. An Brünhilds Stille tritt Grimhild, die ihren lieblichen Mann Sigfrid rächt. Hierin gibt uns Thidrekssaga, im Gegensatz zu der älteren nordischen Völsungasaga, die jüngere deutsche Überlieferung.

Diese älteren und jüngeren Nibelungensagen im Norden helfen Andreas Heusler, wie oben schon erwähnt, die Vorgeschichte des Nibelungenlieds bis in Einzelheiten hinein zu erhellen. Die Vorgeschichte des Epos hat sich nach Heuslers Theorie in zwei Strängen abgespielt, die erst von dem Nibelungendichter um 1200 verbunden worden sind: die Brünhildsage und die Burgundensage. Jene Sage hat vor dem hochmittelalterlichen Epos zwei, diese Sage drei Stufen durchlaufen. Fünf Dichter haben also die Nibelungesage geschaffen und schöpferisch weiterentwickelt, bevor der sechste die beiden Äste vereinigt hat.

Aus den Beobachtungen der nordischen Überlieferungen und der Theorie Heuslers sich ergibt, daß im Nibelungenlied nicht Prünhilt, sondern Kriemhilt in den Vordergrund tritt. Die Dichtung von Sigfrids Tod ist nicht mehr eine Brünhildtragödie. Das Gewicht ist verschoben: Kriemhilt, die ihren Mann Sîfrit aus der Treue rächt, spielt nun eine wichtige Rolle. Die beiden Sagen haben sich damit erst innerlich vereinheitlicht. Noch dazu hat das Nibelungenlied, das aus der Doppelstruktur der Heirat und der Einladung besteht, eine ordnungsmäßige Konstruktion gewonnen.

序

ニーベルンゲン伝説は5、6世紀の民族移動時代のライン河畔フランケンの領土を発祥地として歌謡の形式で生じたものである。その伝説は、その後ドイツにおいてはいくつかの段階を経て、12世紀半ばには叙事詩の形式でさらに発展していったものと推定されるが、それらの伝説相はもちろん遺されていない。ドイツの伝承として文字の形で現在の我々に伝えられているのは、13世紀の『ニーベルンゲンの歌』とその後日譚『哀歌』以外には、ずっとのちの16世紀の韻文『不死身のザイフリート』[1] ただ一つを数えるに過ぎない。我々が取り扱う13世紀初頭の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』以前にあっては、だから、ニーベルンゲン伝説はドイツにおいては直接的には何も遺されていないと言わなければならない。

ところが、『ニーベルンゲンの歌』成立以前に伝説がいくつかの段階を経て発展したであろうことを推定させる資料が現在の我々に豊富に遺されている。北欧への伝承がそれである。この北欧への伝承は、時代によって大きく二つに分けることができる[2]。まずその第一次伝承は、ヴィーキング等によって口頭で遅くとも9世紀初めにはスカンディナビアへ伝承され、のちにはさらにアイスランドへも伝承されていったもので、それらをのちに文字によって書き遺したものが、『古エッダ』と『新エッダ』並びに『ヴォルスンガ・サガ』である。このほかに『ノルナゲスト物語』や『ロートブロック物語』も挙げられるが、これらはいずれも古い伝説相を示しており、ニーベルンゲン伝説の原型を推定させる重要なものである。第二次伝承は、その後ドイツで新たな展開を見た歌謡や説話が、12世紀後半頃からヴェストファーレンの町ゾーストを経由し、ニーダーザクセンのハンザ商人たちを介してノルウェーに伝えられたものであるが、何よりもまず完全な伝説相を伝えている『ティードレクス・サガ』が挙げられよう。このほかにフェロエ島のニーベルンゲンに関する三個の舞踊譚詩、デンマークの譚詩『クレモルトの復讐』なども挙げられよう。これらは上記の第一次伝承の「エッダ」や「サガ」と比べて比較的新しい伝説相を伝えており、ともに『ニーベルンゲンの歌』成立の解明にはなくてはならない重要な資料である。これらの新旧二つのニーベルンゲン伝説を資料として『ニーベルンゲンの歌』の生成過程をある程度正確に推測できるとして、その発展段階説を打ち立てたのは、言うまでもなくアンドレアス・ホイスラーである。『ニーベルンゲンの歌』の研究を深めるためには、我々はここで是非ともこのホイスラーの理論を振り返ってみる必要があろう。そこで本稿では、まず北欧における新旧二つのニーベルンゲン伝承を整理したあと、ホイスラーの発展段階説に従って『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を明らかにし、それによってこの叙事詩の特質を探り出すことにしよう。

1）この作品の生成は14世紀だと推定されているが、それは遺されていない。この16世紀の韻文を種本として17世紀には民衆本も生まれている。

2）雪山俊夫：ニーベルンゲンの歌基礎の研究　大岡山書店1934年　275－301頁参照

Ⅰ．北欧におけるニーベルンゲン伝説

1．『古エッダ』と『新エッダ』

エッダは『古エッダ』と『新エッダ』の二つに区別されるが、「エッダ」(Edda) という語はそもそもスノリ・ストゥルソンの著書にのみあてられるべきものである。彼はアイスランド随一の歴史家・詩人であって、また有力な政治家でもあったが、1220年にアイスランドの若い詩人たちのために詩学書を書いた。その写本の一つに、「この書物はエッダと呼ばれる。スノリ・ストゥルソンがこれを編纂した」と記述されているところから、彼の著書にエッダという名が冠せられていたことは確かなのである。ところが、1643年にアイスランドの南西部スカルホルトの司教ブリニョルフ・スヴェンソンが、13世紀の後半に書写されたものと推定される29個の歌謡の写本を発見した。それはゲルマン神話及び英雄伝説を取り扱ったもので、今日『王の写本』(Codex Regius) と呼ばれているものであるが、これがいわゆる『古エッダ』あるいは『歌謡エッダ』であって、それ以来スノリのエッダを『新エッダ』あるいは『散文エッダ』と呼ぶようになったのである。

さて、まずスノリの『新エッダ』は、第一部「ギュルヴィたぶらかし」、第二部「詩人のことば」、第三部「韻律一覧」の三部から成り立っていて、古詩の鑑賞や、作詩の入門書となっているわけであるが、この中でスノリは、多くの古詩を引用している。なかでも第二部においては、ニーベルンゲン関係の英雄伝説を多く取り扱っているのである。

一方、『王の写本』の方は29篇の古詩を含んでいたが、その後もこの種の古詩が発見されて、現在では断片を混じえて、37篇を数えるに至っている。この『古エッダ』は、その内容からして、大きく神話と英雄伝説の二つに分けられるが、英雄伝説を扱った詩は量的には神話詩よりも多く、ニーベルンゲン関係のものは次の19編である[3)]。

1) 『フンディング殺しのヘルギ』Ⅰ (11世紀中頃　アイスランドのスカルド詩人)
2) 『フンディング殺しのヘルギ』Ⅱ (9世紀中頃または12世紀末　ノルウェー)
3) シンフィエトリの死について
4) 『グリーピルの予言』(12世紀後半　アイスランド)
5) 『レギンの歌』(10世紀中頃　ノルウェー)
6) 『ファーヴニルの歌』(10世紀　ノルウェーまたはアイスランド)
7) 『シグルドリーヴァの歌』(900年頃　ノルウェー)
8) 『シグルズの歌』(断片) (9世紀初期　ノルウェー)
9) 『グズルーンの歌Ⅰ』(11世紀前半　アイスランド)
10) 『シグルズの短い歌』(11世紀末または13世紀初　アイスランド)

3) 谷口幸男訳：エッダ――古代北欧歌謡集　新潮社1973年から引用させて頂く。

11）『ブリュンヒルドの冥府への旅』（11世紀または12世紀初　アイスランド）
12）『ニヴルング族の殺戮』
13）『グズルーンの歌』Ⅱ（10世紀中頃または12世紀末　アイスランドまたはノルウェー）
14）『グズルーンの歌』Ⅲ（11世紀前半　アイスランド）
15）『オッドルーンの歎き』（11世紀前半　アイスランド）
16）『グリーンランドのアトリの歌』（９世紀　ノルウェーで改作）
17）『グリーンランドのアトリの詩』（1100年頃　グリーンランド）
18）『グズルーンの煽動』（11世紀前半または12世紀前半　アイスランド）
19）『ハムジルの歌』（９世紀後半　ノルウェー）

これらの歌謡の中には、北欧で生成発展し、ライン・フランケンからの伝承というよりはむしろ純北欧的な性質のものももちろん多いのであるが、しかし、だいたいはライン・フランケンのゲルマン伝説に基づいており、『ニーベルンゲンの歌』よりもより古い精神を示していて、全く異教的である。また『ニーベルンゲンの歌』には伝えられていないシグルズの生い立ちや悪竜退治及び財宝獲得の経過等が詳細に歌われていて、ニーベルンゲン研究にはなくてはならない重要な資料である。しかし、『古エッダ』は年代と作者とを異にした歌謡の集録であり、ニーベルンゲン伝説に関する部分についても、類似の歌謡が集録されているのみで、一個の明白な筋を生み出すようにはまとめられていない。シグルズの死を取り扱っている『シグルズの歌』（断片）では、欠落部分もあって、不明の部分も多い。ところが、このような欠落部分を補ってくれるものが今日の我々に伝えられている。『ヴォルスンガ・サガ』がそれである。

2．『ヴォルスンガ・サガ』

この「サガ」（Saga）という語はドイツ語でいうSageなどと同じ語源から出ている言葉であると言われているが、ドイツ語のSageが「口碑」「民譚」など、素朴な民間の話に用いられているのに対し、アイスランドのSagaは「物語」「語られたもの」といったほどの意味で、これを広義に用いるときは散文で書かれた全ての叙述を含ませることができるものである[4]。一般的に考えて、「サガ」は歴史的事件ないし人物の散文物語であると言っても差し支えないであろう。このような「サガ」が王などの前で語られたのは11世紀頃に始まると言われるが、それが文字に写されるのは12世紀後半からであり、隆盛期はおよそ百年間続いたと考えられている[5]。このわずか一世紀ばかりの間に多くのサガが書かれ、現存するものだけでも150－200篇に達すると言われている[6]が、『ヴォルスンガ・サガ』はその中の一つであり、13世紀初めから終わりの間、恐らく

4）山室静：サガとエッダの世界　社会思想社1982年177頁
5）山室静：北欧文学の世界　東海大学出版会1969年16頁
6）同上書16頁

は1260年頃にアイスランドの物語詩人によって散文でまとめられたものである。『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を理解する上でも重要な資料の一つなので、以下、この『ヴォルスンガ・サガ』をあらすじの上から6つに分けて、北欧におけるニーベルンゲン伝説の概要をまとめ、その特質をまとめることにしよう[7]。

『ヴォルスンガ・サガ』の梗概

1）シグルズの出生（ヴォルスング一族の系譜）

オーディンの息子シギは、あるとき罪を犯して追放の身となった。シギは、しかし、オーディンから与えられた手勢を連れて、その後略奪遠征を始めたところ、常に勝利に恵まれ、ついにはフーナランド国を奪い取ることができた。身分の高い妻をも娶り、強力な王となってその国を支配した。妻との間には息子レリルが生まれた。

シギが老人となったとき、妻の兄弟たちが彼を妬み、攻め寄せて彼を倒してしまう。その危機に居合わせなかった息子のレリルは、友人と国の豪族たちの支援を得て、その父の仇を討ち、国々と権力と財産を我がものにし、父よりも一層有力な者となった。レリルはさらに自分に相応しい妻を獲得し、二人は長くともに暮したが、子供は一人もできなかった。そこで二人は神々に祈願したところ、オーディンは巨人フリームニルの娘フリョーズにりんごを渡してレリルのもとに届けさせた。それを食べた妻はほどなく身ごもったが、子供を産めないまま、長いときが過ぎた。その間レリルは遠征に出かけて、病にかかり死んでしまう。一方、身重のまま六冬（とせ）を経た妻も、自分の腹を切って子供を取り出させたあと、世を去る。生まれた子供は予想通り身体が大きくてヴォルスングと名づけられ、父の跡を継いでフーナランド国の王となった。ヴォルスング王はやがて、巨人フリームニルから送られてきたその娘フリョーズを妻にして、十人の息子と一人の娘を儲ける。長男はシグムンド、娘はシグニューと呼ばれ、この二人は双生児であった。

ガウトランド国のシッゲイル王は、このヴォルスング王の娘シグニューに求婚するが、彼女自身はそれを嫌う。しかし、父の決意によって婚約が整い、結婚の饗宴がヴォルスング王のところで執り行われる。その当日、一人の男（オーディン）が入って来て、館の真中に立っていたりんごの木（樫の木）に剣を突き刺し、「この剣を抜き取った者にこの剣を与えよう」と言い残して立ち去る。人々はその剣を抜き取ろうとするが、誰にもうまくいかない。最後にヴォルスングの息子シグムンドになってようやくその剣は抜き取られた。シッゲイルは黄金でその剣を買い取ろうとするが、拒否される。愚弄されたと思ったシッゲイルは、仕返しを思いめぐらして、翌日新妻を連れて故国へ帰ってゆく。

7）まとめるにあたっては次のものを参照させて頂く。
菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説（ヴォルスンガ・サガ）東海大学出版会1979年
谷口幸男訳：ヴォルスンガサガ（「アイスランドサガ」所収）新潮社1979年
Paul HERMANN (Übertragen): Nordische Nibelungen. Eugen Diederichs Verlg 1985.

三ヶ月後、ヴォルスング王と息子たちはシッゲイル王の招きに応じてガウトランドに出かけてゆくが、シグニューから前もってシッゲイル王の企みを聞き知る。しかし、ヴォルスング王は「逃げずに、逆に雄々しく討って出る」決心をして、両族は翌日相戦うこととなる。敵は大軍だったため、十人の息子以外はヴォルスング王とともに倒れてしまう。十人の息子たちは捕えられて、一人ずつ森の中で牝狼の餌食にさらされたが、シグムンドだけはシグニューの機転によって救い出された。シグムンドは、森の中に造られた地下室に隠れ住んで、復讐の機会を窺っていた。ところが、十数年後にシグニューから送られてきた二人の息子、すなわち、シグニューとシッゲイル王との間に生まれた子供たちは、とても臆病だったので、仇討ちのためには何の役にも立たずに、殺されてしまう。そこで、あるときシグニューは魔法使いと姿を替えて、兄のところに出かけ、子供を身ごもって戻って来る。やがて生まれたその子供は、男子でシンフィエトリと名づけられ、十歳の頃同様にシグムントのところに送られるが、先の二人とは違って臆病ではなく、勇ましい児であった。十分成長したとき、シグムンドはシンフィエトリと一緒に仇討ちに出かける。シンフィエトリはシグニューとシッゲイル王との間に新たに生まれていた二人の幼い子供を殺して、両者の戦いは始まった。敵は大勢だったため、シグムンドとシンフィエトリは大きな墳(つか)の中に捕えられるが、またもやシグニューの機転でそこを抜け出ることができ、敵が寝静まっている大広間に火をつけ、反撃に出る。シグムンドは妹に大広間から出てくるようにと勧めたが、しかし、シグニューは、この仇討ち成就のために成した自分の悪行の数々に罪を感じて、シンフィエトリは兄の子供であることを打ち明けたあと、火の中に飛び込んでシッゲイル王と家来もろとも死んでしまう。

仇討ちを果たしたシグムンドとシンフィエトリ父子は故国に帰って、ヴォルスング王の後釜になっていた王を追い払い、シグムンド自らが国王となる。シグムンドはボルグヒルドという妻をもらい、ヘルギとハームンドという二人の息子を儲ける。その息子ヘルギは、優れた人物となり、略奪遠征ではフンディング王に出会ってこれを倒し、さらにその息子たちをも返り討ちにして名声を博する。合戦から戻る途中には、ヘグニ王の娘シグルーンと出会い、彼女のためにその強制的な婚約者グランマル王の息子ヘズブロッドと戦い、勝利を収めて彼女シグルーンと結婚し、その国にとどまり、名高い立派な王となる。

ヘルギの腹違いの兄シンフィエトリもまた略奪遠征に出かけたとき、一人の美女に出会って恋をし、その恋敵（継母ボルグヒルドの弟）と戦い、勝利を収める。しかし、それがために帰国後継母ボルグヒルドによって毒を飲まされて死んでしまう。シグムンドは息子の亡骸(なきがら)を懐に抱いて森を通り、あるフィヨルドのところまで来ると、小舟の男（オーディン）にその亡骸を委ねる。シグムンドは家に帰ると、ボルグヒルドを追い払う。彼女はそれから少しして死んでしまう。シグムンド王は自分の王国を治めつづける。

シグムンド王はその後エイリミ王の娘ヒョルディースに求婚する。このヒョルディースに対して、フンディング王の息子リュングヴィも求婚する。父王から夫の選択を迫られた娘ヒョル

ディースはシグムンド王を選んで、結婚の祝宴が催される。そのあとシグムンド王はフーナランドへと帰国するが、舅のエイリミ王もこれに同行する。一方、恋に破れたリュングヴィ王は軍勢を集めてシグムンドの国へ攻め寄せる。戦いの続く中、片目の男（オーディン）が入って来て、シグムンド王の前で槍を上げる。シグムンドはその槍に斬りつけると、彼の剣は真っ二つに折れた。これによって、戦運は逆転し、シグムンド王並びにその舅エイリミ王は軍勢とともに倒れてしまう。勝利を収めたリュングヴィ王は、逃亡中のヒョルディースを手に入れることはできなかったが、これで全てヴォルスング一族を殺したものと思っていた。ところが、森へ逃げていたヒョルディースは、すでにシグムンドの子供を身ごもっていた。ヒョルディースは、夜になって戦死者の横たわる場へ赴くと、シグムンドはまだ少し息があった。シグムンドは妻に、折れた剣の破片を大事に保存し、それを生まれる息子に与えるよう言い残すと、息を引き取る。

ヒョルディースは、夜が明けてそこを通りかかったデンマークのヒャールプレク王の息子アールヴ王に救われ、彼の王国でのちに結婚する。ヒョルディースは真実を打ち明けて、大きな誉れを受けながら暮らすうち、シグムンド王の息子を産む。その子供はその後ヒャールプレク王のもとに連れて来られて、シグルズと名づけられた。シグルズはこうしてヒャールプレク王のもとで成長したのである。

2）若きシグルズの冒険

さて、シグルズはフレイズマルの息子レギンを養い父として教養を積む。ある日のこと、レギンの勧めに従ってシグルズはヒャールプレク王に馬を一頭要求したところ、好きなものを自分で選んでもよいという許可を得る。次の日シグルズは馬選びに出かけると、一人の長い髭の老人（オーディン）に出会い、その老人の知恵で名馬グラニを手に入れる。レギンはさらにまたこの少年の力を借りて、竜となっているファーヴニルを倒そうと思い、ファーヴニルの黄金について物語る。自らの父フレイズマルを殺して黄金を一人占めにしている凶悪な竜（ファーヴニル）の話を聞いたシグルズは、その悪竜退治のためにレギンに剣を造らせるが、どれもすぐ折れてしまうものであった。そこでシグルズは母を訪ねて、父シグムンド王の折れた剣をもらい受け、それでもって再度レギンに剣を造らせた。すると今度は砕けも折れもしない名剣グラムが完成したのである。レギンは約束通りシグルズにファーヴニルを殺すようにと命ずるが、叔父グリーピルから自分の運命を聞き知ったシグルズは、その前にシグムント王たちの仇を討たなければならないと言って、フンディングの息子たちの国へと船に乗って出かけてゆく。

出発して数日後、海は暴風が吹き大波となったが、ある岩鼻を通り過ぎる際、そこで船に呼びかけた一人の男（オーディン）を乗せると、たちまち風は静まり、一行は航海を続けた。フンディングの息子たちの王国に着くと、シグルズは名剣グラムをかかげて勇敢に戦い、相手のリュングヴィ王とその兄弟ヒョルヴァルズをはじめ、王の息子たちをも残らず殺して、輝かしい勝利を収めて帰国する。

帰国するやシグルズは、今度はレギンとの約束通りファーヴニル退治のために荒野へ出かける。シグルズは、そこで出会った長い髭の老人（オーディン）の知恵によって、その悪竜を倒すことができた。シグルズは、竜の心臓を切り取って、串の上で焼いた。心臓から泡が出てきたとき、シグルズは焼けているか調べるために指でさわってみたが、その熱さのため突然指を口に突っ込んだ。竜の心臓の血が舌に触れたとき、彼は鳥の言葉が理解できるようになった。鳥たちがさえずっている声から、レギンが裏切る魂胆でいることを知ると、シグルズは名剣グラムを振り上げてレギンの頭を斬り落とした。そしてシグルズは竜の心臓の一部を食べると、残りは取っておく。そのあとシグルズは悪竜の洞窟で莫大な黄金を見つけ、その所有者となったのである。

鳥の声に従って、シグルズは、そのあとヒンダルフィヤルの山へ出かける。そこで彼は男装して眠っている戦乙女ブリュンヒルドを見つけ、彼女を目覚めさせる。彼女は、オーディンの意に反してヒャールムグンナルを倒したために眠りの棘で刺されたこと、オーディンに結婚を強制されたが、逆に恐れることを知るような男とは結婚しないという誓いを立てたことなどを物語る。シグルズはブリュンヒルドからさまざまな教えを聞いたあと、彼女と婚約を誓い合う。シグルズはブリュンヒルドと別れて、ブリュンヒルドの姉ベックヒルドを妻にしていたヘイミルの邸にやって来る。そこの息子アルスヴィズからシグルズは大歓迎を受け、そこに滞在したが、ブリュンヒルドはその頃養い父ヘイミルのもとに戻っていたため、シグルズとブリュンヒルドの二人は、ここで再会することとなり、婚約の誓いを新たにしたのである。

3）シグルズの結婚（二組の結婚）

さて、ギューキ王という名の王がいた。彼はラインの南に王国を有し、妻はグリームヒルドといったが、彼女は魔法使いで、邪しまな心の婦人であった。彼らの間には三人の息子、グンナル、ヘグニ、グットルムと一人の娘グズルーンがいた。あるとき、その娘グズルーンは一羽の美しい鷹の夢を見て、やがて求婚して来る殿御が誰なのかを知るために、ブズリ王の娘ブリュンヒルド（その兄がアトリ）の館を訪ねる。予言術に長けていたブリュンヒルドはグズルーンの一生を予言したが、悲しい内容だったので、グズルーンは、悲しい気持ちになってギューキ王のもとに帰ってゆく。

さて、その予言の中に出てくるシグルズは、夥しい黄金を携え名馬グラニに乗って、アルスヴィズのもとを離れる。馬に乗り続けて辿り着いたのはギューキ王の城である。シグルズは大変厚いもてなしを受けて、そこに滞在することになる。グリームヒルドは、シグルズがいかに深くブリュンヒルドを愛していて、いかに頻繁に彼女のことを語ることかに気がついた。そこでグリームヒルドは、ある晩のこと、酒席でシグルズのもとにいき、角杯（さかずき）をすすめた。これを飲んだシグルズは、その中には忘れ薬が入っていたので、ブリュンヒルドのことをすっかり忘れてしまった。またあるとき、グリームヒルドはさらにギューキ王を説き伏せて、グズルーンをシグルズの妻にさせるよう努める。こうしてシグルズとグンナルは義兄弟の誓いを交わし、シグルズは

グズルーンと婚礼を挙げた。シグルズはグズルーンに、竜（ファーヴニル）の心臓の一部を与え食べさせると、彼女は以前よりもはるかに冷酷かつ賢くなった。二人の間の息子はシグムンドといった。

さて、またあるとき、グリームヒルドはさらに自分の息子グンナルのもとに行って、ブリュンヒルドに求婚するよう勧める。グンナルは母グリームヒルドの指示に従ってシグルズを伴い、ブリュンヒルドの広間に出かけると、周りには火が燃えていた。グンナルは自分の馬を火に向けて駆り立てるが、馬は逡巡して進まない。シグルズの名馬グラニを借りてもグンナルは火を乗り越えることができない。そこで、グリームヒルドが二人に教えておいたように、シグルズとグンナルとは姿を替えた。グンナルの姿でシグルズは名剣グラムを携え、名馬グラニに拍車を加えると、名馬グラニは火炎の中へ躍り込む。炎を越えて広間の中でブリュンヒルドに出会うと、彼はギューキの子グンナルだと名乗る。そこでブリュンヒルドは誓い通り、彼を歓迎する。そこに彼は三夜とどまり、彼女と一つの床を共にするが、彼は名剣グラムを抜き身のまま自分たち二人の間に置いた。さらに彼は、前に彼女に与えた腕環を彼女の手から抜き取って、ファーヴニルの遺産の中から別の腕環を与えた。このあと彼は、同じ火を乗り越えて、連れのもとに戻って、グンナルと再び姿を替えた。こうして後日、ブズリ王が娘ブリュンヒルドを伴ってギューキ家を訪れると、グンナルはブリュンヒルドと婚礼の祝宴を挙げたのである。シグルズはやがてブリュンヒルドと交わした誓いを思い出すが、そのままにしておいた。

4）シグルズの最期

ある日のこと、女たちが水浴びのためにライン河に出かけたとき、ブリュンヒルドが一番に河の中に入ると、グズルーンはそれはどういうことなのかと言ってわけを尋ねる。ブリュンヒルドは「私の父はあなたの父よりも強力で、夫も多くの偉業をなし、燃える炎を乗り越えたのに対し、あなたの主人はヒャールプレク王の奴隷であった」と言って、グズルーンと対等でなければならない理由はないと主張する。これに対してグズルーンは反発して言う。「夫のことを悪ざまに言うのは、あなたにふさわしくありません。なぜなら、あの方があなたの最初の夫ですから。つまり、あの方はファーヴニルを殺し、あなたはグンナル王だと思っておられますが、あの炎を乗り越えもなさいました。そして、あなたのそばに寝て、あなたの手から腕環を取ったのです。」こう言って、その腕環を見せると、ブリュンヒルドは顔が蒼くなって、ついに塞ぎこんで病の床についてしまう。深い悲嘆ののち彼女はついにグンナルに向かって、「私は生きていたくありません。あなたがシグルズを私のベットに来させたとき、あの方は私だけでなくあなたまでも欺いたのです。私は同じ館に二人の夫を持とうとは思いません。シグルズか、あなたか、あるいは私のいずれかが死ななければなりません」と言って、シグルズ暗殺をグンナルに要求する。大いに悩み出したグンナルは弟ヘグニに「シグルズを殺せば、我々は黄金と全ての権力を欲しいままにできる」と言って、暗殺をほのめかすが、ヘグニは警告して言う。「敵対行為でもって誓いを破ること

は、我らにふさわしくはない。彼は、我らにとって大きな助けにもなっているのだから。」このヘグニの警告に対して、グンナルは「弟のグットルムを唆そう。あれは若く、あまり物事をわきまえていないし、また我々の誓いにも全く加わっていないから」と言って、暗殺に固執する。そこで二人は弟グットルムを呼び寄せて説得し、ついにグットルムはグリームヒルドの勧めなどもあって、この殺人を行う約束をしてしまった。グットルムは翌朝、シグルズがまだ床の中で休んでいるとき、彼のもとに入ってゆき、二度は怯んだものの、三度目に剣を抜いてシグルズに斬りつけると、剣先はシグルズの下の布団まで突き刺さった。シグルズは剣グラムを取って、グットルムめがけて投げつけ仇は討つものの、自らも息絶えてしまう。夫の血に浸されて目覚めたグズルーンは苦しみの吐息をはいた。望みを遂げたブリュンヒルドは、笑い声をあげたが、しかしやがてグンナルに向かって、シグルズは結婚の夜に実は花嫁の貞操を大切にしたことを告白するとともに、将来の出来事を予言したのち、シグルズの死骸を焼く火の中に自ら身を投じて彼の死に殉じてしまうのである。

5）グズルーンの再婚（アトリの最期）

シグルズを失ったグズルーンは歩みつづけ、デンマークのハールヴ王の館にやって来て、ハーコンの娘ソーラのもとに三年半の間とどまる。母グリームヒルドは、そこへ出かけて、娘グズルーンにアトリ王との再婚を勧める。グズルーンは堅く断るが、ついには説き伏せられて、気が進まぬままアトリ王のところに赴く。豪華な祝宴が催されて、グズルーンはアトリの妻となった。しかし、彼女の心は一度としてアトリのために喜ぶことはなく、結婚生活は、さほど睦まじいものではなかった、否、むしろ冷たいものであった。

やがてアトリ王は、シグルズが有していた夥しい黄金は一体どうなったであろうかと思いをめぐらし、策を練る。アトリ王はグンナル兄弟を招待することにして、使者ヴィンギを遣わす。グズルーンはこの陰謀を知り、兄弟たちに知らすべく、文字（ルーン）を刻み、黄金の腕環を一つとって、これに狼の毛を結え、それを使者たちに渡しておいた。しかし、ヴィンギは手紙（ルーン）を見つけて、内容を変えて、グズルーンは兄弟たちがアトリに会いに来るのを望んでいるかのようにした。一行が到着して使者ヴィンギを通じて招待を受けたグンナルは、ヘグニの警告にもかかわらず、使者の巧みな言葉に説き伏せられて、ついに訪問の旅を約束する。

ヘグニの妻コストベラも、またグンナルの妻グラウムヴォルも、不吉な夢を語って旅を思いとどまらせるが、翌朝、一行は出発する。ヘグニの息子たち、ソーラルとスネーンヴァルらも旅に加わった。一行は船を力の限り漕いで行って、陸地に上がり、それからしばらく馬に乗って森の中を進むと、ついにアトリの市（まち）に着いた。ヘグニは門を破り開け、一行は市の中に入る。このときヴィンギはこの招待が欺きであったことを明らかにして威すが、ヘグニは「戦うべきところでは我々は決して引き退りはしない」と強気の返事をする。それから一同が彼にとびかかり、ヴィンギを打ち殺してしまう。

一行がこうして王の館に馬を乗りつけると、アトリ王はさっそく黄金を要求する。グンナルは拒んだため、両者の間は激しい戦いとなる。これを知ったグズルーンは和解を試みるが、彼らは拒んだ。グンナルとヘグニはアトリ王の戦陣に割って入り、勇敢に戦ったが、結局グンナル兄弟の手勢はことごとく滅びて兄弟二人だけとなった。グンナルとヘグニはついに多勢に敗れ、捕えられた。アトリ王がグンナル王に、もし自分の命を助けたくば黄金のありかを知らせよと言うが、それに答えてグンナル王は言う。「その前に、弟ヘグニの心臓が血だらけになっているのを見なければならない。」そこでアトリ王の家来たちは臆病者ヒヤッリをつかまえて、その心臓を切り取り、グンナル王の前に持ち出すと、彼は答える。「これは臆病者ヒヤッリの心臓で、剛勇ヘグニの心臓とは似ても似つかぬわ。これはひどくびくびく震えておる。持主の胸の中にあったときはこの倍も震えていたろう。」アトリは家来たちに今度は実際にヘグニの心臓を切り取らせた。ヘグニは苦しみにさらされている間笑っていた。彼らはグンナルにヘグニの心臓を見せると、グンナルは答える。「これは確かにヘグニの心臓だ。あまり動かないし、持主の胸の中にあった間はもっと動かなかったろう。今、わし一人だけが黄金のありかを知っている。決定を左右するのは今はわし一人だけだ。」アトリは捕虜を蛇の棲む牢獄につないだ。グンナルの両手はかたく縛られていた。グンナル王はグズルーンから送られた竪琴を足で奏でた。すると牢の中の蛇は、この竪琴の調べでことごとく眠ってしまったが、ただ一匹の恐ろしい大ミムシだけは、眠らずに、彼の体の中に喰い入って、ついに彼の心臓にかみついた。グンナルはついにこうして並々ならぬ勇気をもって命を落としたのである。

アトリ王は大勝利を収めたと思い、妻のグズルーンと和解しようと努める。彼女はやさしい物言いをするようになるが、心の中は以前と変わらなかった。アトリ王は彼女の言葉を真に受けて、戦いで死んだ者たちのために葬いの宴を催す。彼女は王に恥をかかせる機会を窺い、自分とアトリとの間の二人の息子をつかまえ、二人の喉をかき切った。息子たちはどこにいるのかと王が尋ねたとき、彼女はこう答える。「あの児らはもういません。あの児らの頭蓋骨は盃に使われてここにあります。あなたはその盃であの児らの血をぶどう酒に混ぜて、お飲みになったのです。それから私はあの児らの心臓を取り出して串で焼きましたが、あなたはそれをお食べになったのです。」二人は憎しみの言葉を数多く言い合った。

ヘグニには、ニヴルンクという息子が生き残っていて、グズルーンに父の仇を討ちたいと話した。彼はアトリ王に対して非常な憎しみを抱いていたのである。そこでグズルーンとニヴルンクは計略を練る。二人は、晩にアトリ王が酒を飲んでから床について寝入ってしまったとき、そこに現われて、二人が一緒に剣をアトリ王の胸に突き刺す。こうしてアトリ王を殺害したのち、グズルーンは館に火を放たせ、アトリ王一族をことごとく滅亡させたのである。

6）グズルーンの娘と息子たち

グズルーンは自分の行為に罪を感じて海へと身を投げ入れたが、波に助けられてヨーナクル王の砦市に達した。ヨーナクル王は、グズルーンを妻にし、ハムジルとソルリとエルプという三人の息子を儲けた。グズルーンにはかつてシグルズとの間に生まれたスヴァンヒルドという名の娘もいたが、この娘はここで育てられた。

この娘スヴァンヒルドにヨルムンレク王という強力な王が求婚する。その求婚の使者となったのが息子のランドヴェールである。ヨルムンレク王の助言者でビッキという男も同行していた。婚約はまとまり、スヴァンヒルドは嫁としてヨルムンレク王のもとへと旅立つことになる。その旅の途中ビッキが王の息子ランドヴェールに「あなたが彼女を妻にするのがふさわしい」と唆し、ズヴァンヒルドにやさしい言葉をかけさせると、彼女もそれに応じた。しかし帰国すると、ビッキは今度はヨルムンレク王を唆してこう言う。「王子様がスヴァンヒルド様の愛をすっかり獲得してしまっておられます。あの方は王子様の愛人です。」王は怒って一旦は息子ランドヴェールを絞首台につけよと命令するが、息子の動作から思い止どまり処刑を中止させる。しかし、その間すでにビッキが手を打ち、王子は死んでいた。ビッキはスヴァンヒルドにも処刑を果たすよう王に助言すると、王は彼女を城門に縛りつけ、馬に踏みつけさせようとする。ところが彼女が目を開いているときは、馬はとても彼女を踏みにじれなかった。これを見たビッキは、彼女の頭に皮袋をかぶせるように言って、こうしてスヴァンヒルドは馬に踏みにじられて殺されてしまった。

グズルーンはこの娘の死を聞き知り、息子たちに仇討ちを勧める。ハムジルとソルリは仇討ちに出かける途中、自分たちの弟エルプを見つけ、どのような手助けをするつもりなのかと尋ねる。「片手がもう一つの片方の手を、片足がもう一つの片方の足を助けるように」と答えると、兄たちはそれは意味のないことだと思って、弟を殺してしまう。ハムジルとソルリは旅を続けて、ヨルムンレク王のところに着くと、ただちにこれを襲った。ハムジルは王の両手を、ソルリは両足を斬り落としたが、このときハムジルが「もしも弟エルプが生きていたら、王の首は落ちていたろうに」と言って弟殺害を後悔する。ヨルムンレク王の家来たちは二人を攻めるが、二人は立派に雄々しく防戦した。そこへ一人の男、白髪で年とった片目の男（オーディン）がやって来て、ヨルムンレク王はその老人から知恵を与えてもらって、家来たちに石を二人にめがけて投げつけさせると、それが二人の最期となったのである。

以上『ヴォルスンガ・サガ』のあらすじを6つに分けてまとめてきたが、1）はシグルズが誕生するまでのヴォルスング一族の系譜であり、2）～4）がそのシグルズに関して冒険、結婚、暗殺等を語っており、そのシグルズ暗殺後の未亡人グズルーンの再婚とその子供たちの物語を伝えているのが5）と6）である。『ヴォルスンガ・サガ』全体は従ってヴォルスングの子孫シグルズを中心とするものであることが明らかであるが、このシグルズを軸としてヴォルスング一族とギューキ一族の系譜を図式化するとすれば、巻末の図式Ⅰ、Ⅱのようにまとめることができるで

あろう。

その図式Ⅰからも一目でわかるように、シグルズ誕生までの物語で中心にいるのは、ヴォルスング王の双生児シグニューとシグムンドである。この二人に至る系譜は、物語としては簡潔すぎるきらいがある。この部分を語る『古エッダ』も伝えられていないことも考慮に入れれば、これは、系譜上主神オーディンとヴォルスングをつなぐためにサガの作者あるいは編者が新たに付け加えたものと考えてよい[8]であろう。その後のシグニューとシグムンドを中心とする物語についても、『古エッダ』には遺っていないが、シグムンドの息子ヘルギとシンフィエトリに関しては、三つの歌謡が『王の写本』に遺されている。このヘルギ及びシンフィエトリとその父シグムンドの求婚については、『ヴォルスンガ・サガ』では下の図のような興味深いパラレルが認められる。

ヘルギ	シンフィエトリ	シグムンド
1．恋敵ヘズブロッド（戦いによる勝利）	1．恋敵（継母ボルグヒルトの弟）（戦いによる勝利）	1．恋敵リュングヴィ（花嫁自身の選択）
2．シグルーンと結婚	2．ある美女と結婚	2．ヒョルディースと結婚
3．その国の王となる	3．帰国後、継母より毒殺	3．恋敵より攻め滅ぼさる

それぞれ求婚する場合に恋敵が存在していて、たいていはそのためにのちには死ぬこととなるのである。ただヘルギだけはこの『ヴォルスンガ・サガ』においてはその最期までは語られていないが、しかし、『古エッダ』中の『フンディング殺しのヘルギ』Ⅱによれば、やはり恋敵ヘズブロッドの援助者ヘグニ（シグルーンの父）の子ダクによって殺されることになっている。それがこの『ヴォルスンガ・サガ』では語られずに、ヘルギが途中で退場しているのはこの作品の構成の不徹底さを示すものと言えようか。それはともかく、シグルズが誕生するまでのヴォルスング一族の系譜は、ドイツからの伝承というよりも北欧で生成発展した部分が多く、より北欧的であると言ってもよいであろう。

この『ヴォルスンガ・サガ』の中心に位置するシグルズの物語2）～4）に関してはだいたいにおいてドイツの伝承と考えてよいが、このシグルズの冒険の中にもオーディンが関与していて北欧神話的傾向を強めている点に大きな特徴があると言えよう。父の仇討ちを果たすシグルズは、今やオーディンの英雄なのであり、名剣グラムも名馬グラニも結局のところオーディンから渡されたものである。シグルズがそのあとのあらすじで目覚めさせることになるブリュンヒルドも、ワルキューレであり、その魔法の眠りもオーディンによって罰として与えられていたものである。しかもこのブリュンヒルドにはさらに強い関心が寄せられ、ブリュンヒルドの内面化がより深くなっている点にもこの作品の大きな特徴があると言えよう。すなわち、ブリュンヒルドはシグル

8）菅原邦城訳・解説：前掲書204頁参照

ズと誠実な誓いとともに婚約を誓うが、その後グンナルの母の忘れ薬によってシグルズがグズルーンと結婚することとなり、これによってブリュンヒルドの嫉妬と憎しみと愛とが一層内面化される結果となっているのである。さらにこのグンナルの妻ブリュンヒルドはアトリの妹となり、オッドルーンの姉ともなって、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説を結びつけるだけではなく、重要な役割を演じる予言者ともなっていて、いくつかの伝説を結びつける重要な人物となっている。このようにブリュンヒルト伝説は北欧では南のドイツにおいてよりももっと強く発展し、新たな伝説へと成長していったのである。

シグルズがギューキ王の娘グズルーンと結婚後、暗殺されたそののちの物語5）～6）では、巻末の図式Ⅱからも明らかなように、中心人物はグズルーンである。このグズルーンは下記の図のようにヴォルスング一族のシグニューと明白なパラレルを示していると言えよう。

シグニュー	グズルーン
1．シッゲイル王といやいや結婚	1．アトリ王といやいや結婚
2．シッゲイル王の招待 （兄弟たちに夫の悪企みを伝える）	2．アトリ王の招待 （兄弟たちに夫の悪企みを伝える）
3．兄を二度助ける	3．兄弟たちに和解を勧める
4．復讐のため二人の子供を犠牲にする	4．復讐のため二人の子供を犠牲にする
5．復讐を遂げる （火を放つ⟶死ぬ）	5．復讐を遂げる （火を放つ⟶生き延びる）

ただグズルーンの場合は、シグニューと違って、火を放って、その後海に身を投げて自殺をはかるものの、波に助けられて、生き延び、三度目の結婚をしている点で、パラレルをくずしているとも言えるが、しかしそれによってグズルーンは今度はヴォルスング一族のシグムンドの三度に及ぶ結婚とパラレルを示す結果となっている（巻末図式Ⅰ、Ⅱ参照）。

そのほかにも父の仇討ち、シグニューの機転、嫉妬、姿交換等、いくつかのパラレルを指摘することができるかも知れないが、しかし、全体の構成は稚拙な点を多く残しているのもまた事実である。シグルズは二度までブリュンヒルドと別れて旅立つことになっているが、その動機があいまいであり、このような点でも『ヴォルスンガ・サガ』はいかにもいくつかの歌謡をつなぎ合わせたといった感じである。しかし、この『ヴォルスンガ・サガ』は、『古エッダ』の知らないシグルズの父シグムンドの物語を伝えているのみならず、『古エッダ』の欠落部分を補なってもいるし、さらに『古エッダ』の諸歌謡の相互の不十分な連絡をなだらかにして筋をまとめているので、ニーベルンゲン伝説の北欧伝承についての概観を知ることができる点に大きな意義があると言えよう。ともかくもこの『ヴォルスンガ・サガ』は、オーディンに結びつけられて北欧神話的傾向が強いとはいえ、古い伝説相を伝承するものであり、その点で『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を考察する上でも重要な資料の一つとなっているのである。

3.『ティードレクス・サガ』

『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を理解する上で重要な資料として『古エッダ』及び『ヴォルスンガ・サガ』とともに次に是非とも考慮に入れられなければならないのが『ティードレクス・サガ』である。東ゴートのディートリッヒ大王（北欧ではティードレク）は、ジークフリートとともに古代ゲルマン時代の英雄として最も人々に愛された伝説的人物であるが、この人物に関するドイツの歌謡や説話が、ヴェストファーレンの町ゾーストを経由し、ニーダーザクセンのハンザ商人を介してノルウェーに伝えられると、その地の物語詩人たちはこの英雄に関する説話を書き留め、それらがやがて1254年頃北欧の一詩人――それはアイスランド人であったと言われている――によって集録されることとなる[9]。これが『ティードレクス・サガ』である。この説話集はもちろんティードレックを中心人物とするものであるが、ニーベルンゲン伝説も含まれている。それは低ドイツからの伝承であり、原拠は古いものではなく、比較的新しい伝説相を含んでいる。この点で北欧第二次の伝承を探るための最も重要な資料を提供しているのである。以下、『ティードレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説に関する部分をまとめて、『古エッダ』及び『ヴォルスンガ・サガ』と異なる点を指摘し、新しい伝説相を探っておきたい[10]。

『ティードレクス・サガ』の梗概

1）ジグルトの出生

タルルンゲン国のジグムント王はイスパニアのニードゥング国王に使者を送り、彼の娘ジジベを妻にもらいたいと求婚した。ニードゥング王の返事は、見知らぬ国へ嫁がせるわけにはいかないので、国王自らが求婚に来るなら承諾するということであった。そこでジグムント王は四百名の騎士を引き連れてニードゥング王のもとに出かけた。華やかな歓迎を受け、約束通り結婚が承諾され、盛大な結婚式が行われた。宴が5日間続いたのち、ジグムント王は妻を連れて自分の国へと帰って行った。

帰国して数日後、ジグムント王は義弟のドラゾルフ王から出陣の援助を依頼されて、ただちに軍勢を集めて出かけて行った。留守中は二人の伯ハルトヴィーンとヘルマンに国の保護をゆだねていたが、ハルトヴィーンは不実にも、ある日ジジベ王妃に不義の求愛をした。執拗な求愛を王妃はもちろんのこと拒絶した。ハルトヴィーンはヘルマンにも援助をあおぎ、王妃を説き伏せようとしたが、王妃は堅く拒否した。その後も求愛が繰り返されたが、ハルトヴィーンの目的は達せられなかった。

やがてジグムント王が戦場で大手柄を立てて帰国するという知らせが入った。ハルトヴィーンとヘルマンは、留守中の不義を王妃が国王に全て話してしまうことを恐れて、策略を練る。二人

9）雪山俊夫：前掲書294頁

10）まとめるにあたっては>>Fine ERICHSEN: Die Geschichte Thidreks von Bern (Tule 22. Band) Eugen Diederichs Jena 1924.<<を使用する。

は国王を出迎えに出かけて、先手を打つことにした。国王に会って、ハルトヴィーンはこう言う。「王妃様は召使いと関係を結び、召使いは毎晩王妃様の腕の中で眠りました。王妃様は今そのお子を宿しておられます」と。ヘルマンも、そのことは真実であると付け加えたので、国王は不貞の王妃をどうしたものかと、二人に相談するが、ハルトヴィーンの知恵に従って、十年間もの間誰も足を踏み入れたことのないシュヴァーベンの森に連れて行って、彼女の舌を切り取って、彼女をそこで過ごさせることにした。

二人の伯は急いで城に戻って、国王がシュヴァーベンの森で待っている旨を王妃に伝えた。王妃はただちに支度をして、二人の伯とともに出かけるが、誰も足を踏み入れたことのない森の谷間に下りて行くと、王妃はだまされたことを知って、ひどく泣いた。ハルトヴィーンは国王に言いつけられた通り、王妃の舌を切り取ろうとすると、ヘルマンは何の罪もない王妃を助けようと言い出したので、二人は戦いとなった。この瞬間王妃は倒れて、一人の男の子を産み落とした。彼女は持って来たガラス容器の中に子供を入れ傍らに置いた。二人の伯は激しく武器を交わして戦ったが、ハルトヴィーンが王妃の横たわっているところに倒れたとき、その足がガラス容器にあたって、ガラス容器は川の中にころがって行った。この瞬間ヘルマンは剣を振り上げてハルトヴィーンの首を刎ねた。王妃は子供の入れられた容器が川に流れたのを見て、気絶し、死んでしまった。

ヘルマンはジグムント王のもとに戻って、虚偽を交えた報告をすると、国王は、命じた通りに実行しなかったヘルマンを咎め、怒って彼を追放の身にした。ヘルマンは馬に乗り去って行ったが、死罪を免れたことを喜んだ。一方、ジグムントは彼の国を支配したが、ジジベのことをいたく哀れんだ。

2）若きジグルトの冒険

さて、子供の入れられたガラス容器は川を下って海へ流れ出た。まもなく引き潮でもって陸に着いた。そこへ一匹の雌鹿が寄って来て、子供をその住み家へと連れて帰った。そこには二匹の子鹿がいたが、雌鹿はその子供にも同じように乳を飲ませた。子供は12ヶ月間そこにとどまった。子供は4歳のほかの子供たちと同じように大きくなった。

ある日ミーメという鍛治屋の男が炭焼きのため森に出かけた。ミーメが炭焼き窯のそばにいると、その雌鹿に育てられた子供が近寄って来た。ミーメはその子供を家に連れて帰って、養育することにした。子供はジグルトと名づけられ、ミーメのもとで成長し、12歳になった。ジグルトは乱暴で、ミーメの下僕をぶちのめしたので、誰もそれに耐えられなかった。ミーメはジグルトに鍛治屋のまねをさせてみるが、何の役に立ちそうにも見えなかったので、ジグルトを殺すことを企んだ。ミーメにはレギンという弟がいたが、その弟は強くはあったが、意地が悪く、魔法を使っていたので、竜になって森の中で過ごしていた。ミーメはその弟の竜のところへ出かけて、ジグルトを殺してくれと頼む。翌日、ミーメはジグルトに9日分の食糧を与えて炭焼きのため森

へ行かせた。ジグルトは森へ行くと、仕事を済ませたあと、一度に9日分の食べ物、飲み物を平らげてしまった。そこへ大きな竜が現われたが、ジグルトは簡単に竜を打ち倒し、それを料理して食べることにした。斧で竜の肉を切り取って、鍋を火にかけた。やがて料理が十分煮えたか調べるために指を鍋の中に入れたところ、彼は火傷をして咄嗟に指を口の中に入れた。すると、彼は鳥の言葉がわかるようになり、二羽の鳥が枝でさえずっているのを聞いた。その鳥のうちの一羽がジグルトにミーメの悪企みを教えた。さらにジグルトは竜の血を身体や手に塗りつけると、角質となったので、衣服まで脱いで身体の至るところに塗りつけた。しかし、肩の間だけは血がつかなかった。ジグルトがミーメのもとに帰ると、ミーメはジグルトの機嫌をなおそうとして、グラムという剣などを与えるが、ジグルトは逆にその剣でもってミーメを試し斬りにした。

ジグルトはその後、ブリュンヒルトの城を訪ねた。ブリュンヒルトは馬の飼育場を所有しており、名馬グラーネがいるとミーメから聞いていたからである。城に着くと、城門が閉まっていたので破って入って行った。騎士たちと戦っているうちに、ブリュンヒルトがこの騒ぎを聞きつけて、ジグムントの息子ジグルトが来たことを悟り、彼を喜んで迎え入れた。しかし、彼はブリュンヒルトから何者であるかを尋ねられても、答えることができず、逆に彼女から自分の素姓を教えてもらった。ブリュンヒルトは彼の願いに応じて名馬グラーネを与えた。ジグルトはさらに旅を続けベルタンゲン国のイーズンク王のもとに行った。彼は11人の息子を持っていて強力な戦士であった。ジグルトを歓迎し、彼を助言者かつ旗手にして長いこと自分のそばに置いたのである。

3）ジグルトの結婚（二組の結婚）

アルドリアーンという名の国王がニフルンゲン国を支配していた。国王にはグンナル、ゲールノーツ、ギーゼルヘルそしてグリームヒルトの4人の子供がいたが、ヘグニはその4名とは異父兄弟であった[11]。アルドリアーンの死後、グンナルが国王となって国を支配していた。このグンナル王はあるときティードレク王の伴をして評判高いベルタンゲン国のイーズンク王のところに出かけた。そこでティードレク王は、その国に滞在していたジグルトと決闘するが、結果はティードレク王の勝ちと決まり、ジグルトはその後ティードレク王とともにグンナル王のニフルンゲン国へ行くことになるのである。このニフルンゲン国ではジグルトがグンナル王の妹グリームヒルトを妻にもらうこととなり、盛大な結婚式が行われる。宴は5日間続いたが、その席上で若きジグルトは義兄グンナルに向かって、ゼーガルトのブリュンヒルトに求婚するがよいと勧めた。ジグルトは道を心得ているので、手助けをするというのである。グンナル王は、ティードレク、ヘグニそして若きジグルトに伴われて、ブリュンヒルトの城へと出かけて行った。そこに着くと、ブリュンヒルトはティードレク王とグンナル王を丁重に出迎えたが、若きジグルトはとても悪くあしらった。彼が今や一人の妻を持っていることを彼女は知っていたからである。初めて

11）この作品の中ではヘグニは、すなわち、ニフルンゲン国王アルドリアーンの妃と或る妖精との間に生まれた子供であるとされている。（Vgl. Fine ERICHSEN: a. a. O., S. 223−224.）

会ったとき、ジグルトとブリュンヒルトは婚約を誓い合っていたのである[12]。ジグルトは彼女がグンナルと結婚することを勧めるが、彼女は誓いを破ったジグルトをなじる。そこへティードレク王とグンナルも話し合いに加わり、結局ブリュンヒルトはグンナルの妻になることを承諾したのである。

今や大きな饗宴が準備され、グンナル王はブリュンヒルトと結婚式を挙げた。その第一夜、グンナル王はブリュンヒルトの横に寝ようとしたところ、彼女は力ずくでそれを許さなかった。二人は格闘したが、彼女は帯で彼の手と足を縛り上げ、彼を釘に吊してしまった。第二夜も第三夜も同様であった。そこでグンナル王は、兄弟の誓いを交わしていたジグルトに助けを求めるべく、彼に真実を話した。するとジグルトは答えて言う。「彼女は、処女である限りは、力で彼女に匹敵しうる男はいないような女性です。しかし、彼女は処女が奪われれば、普通の女性よりも強いということはありません。」グンナルは、ジグルトが誰にも漏らさぬことを信じて、彼に全てをゆだねた。ジグルトも約束した。さて、夜になってグンナルがベットにつくことになったとき、彼は若きジグルトが彼の寝床につくよう手はずを整えた。ジグルトは頭に頭巾をかぶり、それからブリュンヒルトを押さえつけて、彼女の処女を奪ってしまった。朝になったとき、彼は彼女の手から指環を抜き取った。そのあと、彼はグンナルと衣服を交換したが、それに気づいた者は誰もいなかった。宴は5日間続いた。そこで客人たちは出発の準備をした。グンナル王はブリュンヒルトの町を治めるべく、一人の領主を任命し、自らは妻ブリュンヒルトとともにニフルンゲン国へと帰って行った。帰国すると、グンナルは義弟若きジグルトと兄弟ヘグニ及びゲールノーツとともに平和に国を治めた。一方、ティードレク王は家来を連れて故国のベルンへと帰って行った。

4）ジグルトの最期

ニフルンゲン国のヴェルニツァの町ではグンナル王がこうしてその弟ヘグニと若きジグルトとともに平和に君臨していたのであるが、あるとき二人の王妃が口論をしてしまった。王妃ブリュンヒルトが広間に入って行ったとき、グリームヒルトが立ち上がって礼を行わなかったからである。なぜ立ち上がらないのかという質問に対して、グリームヒルトはこう答える。「まず第一にこの座席は私の母のものであり、ここにすわるのはあなたよりも私の方がふさわしい。」それに対してブリュンヒルトは、「たとえあなたの母がここにすわり、あなたの父がこの町を支配していたにせよ、現在は私がここにすわるべきです。あなたはジグルトのあとを追って森へ行って雌鹿の小道を捜し回るがふさわしいでしょう」と答える。グリームヒルトはついに「あなたの処女を奪ったのは誰ですか。あなたの最初の夫は誰ですか」と尋ねる。ブリュンヒルトが求婚の旅の次第を語ってグンナルがその人だと答えると、グリームヒルトは「あなたの処女を奪ったのは、若きジグルトです。証拠がこの黄金の指環です。これは彼があなたの処女を奪ったあと、指から抜

12）ところが、この作品で二人が初めて出会った場面では、婚約を誓い合ったという記述は欠落している。編者が書き落としたのであろうか。

き取って、私にくれたものです」と応戦する。ブリュンヒルトはその指環を見ると、自分のものであることを悟り、みんなのいる前でこのことを口論したのを後悔した。ブリュンヒルトは大変赤くなって、黙って一言も言わずに立ち上がって外へ出た。

ブリュンヒルトは、グンナル、ヘグニそしてゲールノーツの三人が狩りから戻って来るのを見かけ、彼らを出迎えて、彼女の嘆きを訴えた。ジグルトが誠実の誓いを破ったと聞かされたグンナルは、ジグルトの暗殺を企んで広間に入った。グンナルもヘグニもゲールノーツも、何も聞かなかったかのように振る舞った。若きジグルトはこのとき狩りに出かけていて、まだ帰ってはいなかったが、2、3日後の夕方、戻って来た。

何日か経って一同がまた狩りに出かけることになった。グンナル王らはジグルトとともに馬に乗って森へ出かけて行き、疲れ果てるまで猛獣を追った。とても暑かったので、彼らはとても疲れていた。小川のところで、グンナルがかがんで水を飲み、その弟ヘグニも飲んだ。今や若きジグルトもやって来て、他の者と同様、身をかがめて水を飲んだ。そのときヘグニが立ち上がって彼の槍を両手でつかんでジグルトの両肩の間に突き刺すと、槍は彼の心臓を貫いて胸から出てきた。ジグルトは無念の思いを口に出しつつ、息絶えた。彼らはジグルトの死骸をかかえて城へと帰って行った。

ブリュンヒルトは胸壁に立っていると、グンナルとその弟ヘグニ、ゲールノーツが若きジグルトの遺体を運んで城に帰っているところを見て、急いで彼らを出迎えに行き、死体をグリームヒルトのところに運ぶようにと命じた。死体がベットの中に投げ込まれると、グリームヒルトは目を覚まして、死んでいる夫を発見して嘆いて言った。「あなたの楯は傷ついておらず、兜もどこも壊れていない。あなたは殺害されたに違いない。誰が殺したかわかったら、きっと復讐をしてやろう」と。それに答えてヘグニは、ジグルトは殺されたのではなく、猪にやられたのです、と説明する。グリームヒルトは、その猪とやらはあなたヘグニ以外の何者でもない、と言ってひどく泣いた。彼らはそこを去って広間に入ったが、気分が爽快であり、ブリュンヒルトも同様であった。一方、グリームヒルトは家来を呼んで若きジグルトを埋葬させた。彼の死が人に知られると、誰もがジグルトほど立派な勇士はいないと、彼の死を悼んだのであった。

5）グリームヒルトの復讐

ズザートのアッティラ王は、若きジグルトの未亡人グリームヒルトに求婚するため、使者として彼の甥オージトをニフルンゲン国へ遣わせた。アッティラ王の意向を聞き知ったグンナル王は、グリームヒルトのもとへ行き、事情を話すと、彼女は兄が了解するなら、喜んで同意する旨を伝え、婚約は何の問題もなくまとまった。

オージトより吉報を受け取ったアッティラ王は、ただちに花嫁グリームヒルトを迎えるべく、五百名の騎士と多くの小姓を連れて、ニフルンゲン国へと向かった。その頃アッティラ王のもとに滞在していたティードレク王も同行した。グンナル王は客人たちを丁重に出迎え、そこでは盛

大な宴が催され、アッティラ王とグリームヒルトが結婚式を挙げた。宴が終わると、グンナル王は別れにあたってティードレク王に若きジグルトの馬グラニを贈り、辺境伯ロディンゲイルにはジグルトの剣グラムを与えた。アッティラ王一行はズザートへ帰り、国を護った。しかし、彼の妻グリームヒルトは毎日いとしい先の夫ジグルトのために涙を流していた。

7年が過ぎたとき、グリームヒルトはある夜アッティラ王に向かって兄弟たちを招待するよう説き伏せる。その際彼女は国王に、ジグルトの財宝のことを話し、その財宝がこの国へ来たら国王のものであることを約束した。アッティラ王は、黄金欲の強い人物であったので、ただちに彼らを招待することにし、ニフルンゲン国へ使者を送った。

使者たちはニフルンゲン国に到着すると、グンナル王に用向きを伝えた。グンナル王は兄弟ヘグニ、ゲールノーツ、ギーゼルヘルを呼んで相談した。ヘグニは抜け目ないグリームヒルトを警戒して招待に応ずることに反対するが、グンナル王はフン族の国へ行くことを主張し続けた。ヘグニは繰り返し諫止したが、自分の母のことを非難されたのがしゃくにさわり、招待の旅に応じる決心を明らかにした。

母后オーデは不吉な夢を見たことを語って、思いとどまらせようとするが、ヘグニは「旅立ちはすでに決定されたことなのだから、変えるわけにはいかない」と言って、夢など気にせずに旅立ちを主張する。母后はせめてギーゼルヘルだけでもとどまるようにと働きかけるが、ギーゼルヘルも出かける決意を示して、武器を持って来た。

グンナル王は千人の家来を集めて出発した。一行は今やライン河とドーナウ河が合流するところ[13]へ来ると、船が見つからずに、その夜はテントを張ってそこにとどまることになった。ヘグニは、ほかの者たちが眠っている間、武器を手に取って河の上流へと出かけた。すると、水の乙女たちに出くわし、一族の運命を占わせたところ、乙女たちは「あなた方はこの河を渡ることはできますが、戻って来ることはできません」と答えたので、ヘグニは剣で乙女たちを斬り殺してしまった。そのあとヘグニはさらに上流へのぼって渡し守を見つけてニフルンゲン族のところに戻って来た。ヘグニが戻ると、一族は大喜びで、その船に乗った。河の中央に来たとき、ヘグニは一族のフン族への旅の知らせが先行するのを防ぐためにその渡し守の首を刎ねた。「なぜそんな悪いことをするのか」というグンナルの質問に対して、ヘグニは「なぜこの旅で悪いことをするのを慎む必要がありましょうか。誰も戻って来れないことはわかっているのです」と答える。ヘグニが舵を取って、何とか対岸に渡り、何度か繰り返して全軍の渡河を終了させた。一族はさらに進んで行った。

一行は辺境伯ロディンゲイルの国バカラールの国境へ来たとき、その見張人エッケヴァルトと出会い、その夜はロディンゲイルのところに宿を頼むことになった。ロディンゲイルはニフルン

13) このあとに続く「流れが合流するところでは川幅はとても広かった」という記述のために、編者の想像の中でライン河とドーナウ河を合流させたのであろうか。ともかくも、この渡河の場面では広い河が考えられている。

ゲン族を丁重に出迎えた。一行は、飲んで楽しく過ごした。ロディンゲイルは妻グデリンダと相談して、娘を花嫁としてギーゼルヘルに与えることになった。妻は、しかし、気がかりであった。彼女はグリームヒルトが毎日彼女の先の夫若きジグルトのことを嘆き悲しんでいることを知っていたからである。翌朝、一行が出かけるにあたって、ロディンゲイルは黄金の兜をグンナルに、新しい楯をゲールノーツに贈り、ギーゼルヘルには娘と名剣グラム（若きジグルトがかつて所有していた）を贈った。ヘグニには、何がよいかと尋ねたところ、ヘグニ自身が申し出たナウドゥングの楯を贈ることになったが、それを見て辺境伯夫人は彼女の兄ナウドゥングの死を思い出してひどく涙を流した。一行は旅立つことになったが、ロディンゲイルも家来たちをひき連れて自ら彼らに伴ってついて行くことになった。

一行はトルタという名の町を経て、ついにアッティラの居城ズザートに着いた。王妃グリームヒルトは一行が町に入って来るのを見ると、若きジグルトの傷のことを思い出して、ひどく泣いたが、ニフルンゲン族を出迎え、挨拶をした。アッティラ王も義兄弟たちを丁重に出迎えた。グリームヒルトは彼らの上着の下には輝く鎧が着てあるのを見て取った。ヘグニはグリームヒルトを見ると、フォルケールとともにすぐに兜をかぶり、しっかりと結びつけた。「ジグルトが所有していたニフルンゲンの財宝は持って来たか」というグリームヒルトの質問に対して、ヘグニは「悪魔と楯と、兜と剣を持って来た」と答えて、戦う態度を見せた。グリームヒルトはギーゼルヘルとグンナルの間にすわって、ジグルトのことを嘆くと、ヘグニがまたもや口を出して、「ジグルトの話はやめよう。傷はもう治りはしないのだ」と言い返す。グリームヒルトは立ち上がって去って行った。ニフルンゲン族はその夜はおいしいお酒を飲んで楽しく過ごし、ぐっすりと落ちついて眠ったのであったが、翌朝ヘグニはティードレクから、「フン族の国では注意するがよい。グリームヒルトは毎日若きジグルトのことを嘆いているから」という警告を受けたのである。

ニフルンゲン族は皆起きると、町の中を行進した。アッティラ王はその日、庭園で宴を催すことにして、準備をさせた。その間グリームヒルトはまずティードレク王、次にブロドリーン、そして最後にはアッティラ王のところに行って、復讐の援助を依頼するが、いずれも拒否された。

宴の準備ができると、アッティラ王は客人たちを庭園へと招いた。ニフルンゲン族がそこへ入ると、王妃が武器を持って歩かぬように言う。ヘグニは、フン族の国にいる限り、武器はわが身から放すわけにはゆかないと言って反抗する。彼らは武装したまま庭園の中に入った。彼らはさらに入口に見張りとして小姓たちを置いた。ヘグニとゲールノーツがそれをしたのである。

今やグリームヒルトはイールンクのところに行き、復讐を依頼すると、イールンクは王妃のためにそれを承諾し、部下に武装を命じた。王妃はまず外のニフルンゲン族が庭園に入って来れないよう、また中にいるニフルンゲン族が生きて外に出れないようにと、小姓たちを打ち殺させた。王妃はそれから宴の行われている庭園に入って行き、自分の席についた。すると彼女の息子アルドリアーンが跳んで来て彼女に口づけをした。王妃は息子に向かって、勇気があるなら、ヘグニのところに行って、こぶしで彼の頬をぶってみろ、と唆す。子供は言われた通り実行した。それ

は子供とは思えないほどの強力な一撃だった。ヘグニは左手で子供の髪をつかんで、「母の仕業だな」と言いながら、右手で剣を握り、その子供の頭を斬り落とし、グリームヒルトの胸の中に投げ込んだ。ヘグニは子供の保育官をも斬り殺した。アッティラ王はこれを見てフン族の勇士に武装を命じて、ニフルンゲン族と戦うこととなった。ティードレクは自分の館に戻って、両者が戦いとなったことを嘆いた。この日はこうして激しい戦いが繰り広げられた。戦いは庭園の中でも、またその外でも行われた。アッティラの甥オージトはグンナルと敵意を見せ合って長い間戦い、ついにグンナルを捕えて、国王と王妃のところに連れて来た。アッティラ王は王妃の助言でグンナルを蛇の牢へ閉じ込めさせた。グンナルはそこで命を落としたのである。

グンナルが捕えられたことを聞いたヘグニとゲールノーツは、たけり狂ったようにフン族と戦った。ギーゼルヘルも名剣グラムで多くの兵を殺した。彼らの攻撃はとても激しかったので、フン族は逃げたり殺されたりした。ニフルンゲン族は庭園からすっかり外へ出ると、大きな鬨(とき)の声を上げ、逃げて行ったフン族を臆病な犬だと罵った。ニフルンゲン族は町の中を駆けて進んだが、すでに全く暗い夜であった。アッティラ王は館を閉じたのでニフルンゲン族は何もできなかった。

夜が明けて再び激戦となった。ゲールノーツはブロドリーンと対戦し、激しい戦いのあと相手の頭を斬り落した。このことを聞いた辺境伯ロディンゲイルは怒って部下とともにニフルンゲン族を討つため、戦いに加わった。ヘグニはフン族の真っ只中で勇敢に戦ったあと、客殿に入って戸口を防衛した。グリームヒルトはヘグニを見て、客殿に火を放たしめ、イールンクにヘグニの首を討ち落としてくるようにと励ます。イールンクは燃えている客殿の中に突入し、ヘグニの太ももに傷を負わせて戻って来た。イールンクは再度王妃の励ましで突進して行って、ヘグニと戦うが、今度はヘグニが槍をイールンクの胸に突き刺し、イールンクは命を落してしまった。

次いでロディンゲイルも鋭くニフルンゲン族に攻撃をしかけた。若きギーゼルヘルが彼と対戦した。ギーゼルヘルの剣グラムは大変切れ味がよかったので、ロディンゲイルは大きな傷を受けて倒れて死んでしまった。ロディンゲイルはかつて自分がギーゼルヘルに贈っていたその剣で命を失ったのである。

ロディンゲイルが死んだことを知ったティードレクは、中立の態度をとっていたが、もはやじっとすわったままでいることはできなくなり、怒ってニフルンゲン族に攻撃をしかけ始めた。さすがのヘグニも退かざるをえず、ゲールノーツとギーゼルヘルのいる広間に逃げ込む。ティードレク王とヒルディブラントがあとを追う。ティードレク王はその中に勇敢に攻め入り、戸口のところでフォルケールと渡り合い、兜をめがけて最初の一撃を加えると、頭は斬り落とされた。ヒルディブラントはゲールノーツに攻撃をしかけ、剣で斬り込むと、ゲールノーツは致命傷を受けて倒れ死んでしまった。今やこの客殿ではティードレクとヘグニが対決し、ほかのところでヒルディブラントとギーゼルヘルが対決しているだけであった。そこへアッティラ王が現われ、ヘグニは、ジグルトの死んだ当時はまだ5歳であったギーゼルヘルの命を請うが、しかしギーゼル

ヘルは、兄弟たちよりも生き延びることを潔しとせず、激しくヒルディブラントに攻撃をしかけ、ついに倒されてしまう。今やティードレク王とヘグニは長い間激しく戦い合ったが、いずれが勝つともほとんどわからなかった。戦いは長く続いたので、二人は疲れけがをしていた。二人はお互い罵り合うと、ティードレク王は怒りのあまり荒々しくなったため、ヘグニの鎧は大変熱くなり、火傷をしてヘグニはついに捕えられてしまった。

グリームヒルトは燃えている家から大きな燃え木を持ってきて、彼女の兄ゲールノーツとギーゼルヘルの口の中へその薪を入れて生死を確かめていた。ティードレク王はそのグリームヒルトのむごい行動を見て、アッティラ王に向かって嘆いた。アッティラ王も「彼女は悪魔だ。彼女を殺すがいい」と言ったので、ティードレク王はグリームヒルトに跳びかかって、彼女を断ち斬った。

ティードレク王は深傷を負ったヘグニを看護させたが、ヘグニの寿命はあまり長くなかった。ヘグニはティードレク王に、夜一緒に過ごすことのできる女性を与えてほしいと願い出ると、それが実現された。朝、ヘグニはこの女性に言う。「時が経てば、お前は私の息子を産むであろう。子供にはアルドリアーンと名づけてほしい。ここにある鍵をお前が保管し、子供が大きくなったら、それをその子に与えよ。この鍵はニフルンゲン財宝が隠されているギギスフリートの地下室の鍵だ。」こういってヘグニは死んでしまった。後日譚によれば、ヘグニとこの女性との間に出来た子供アルドリアーンは、のちにアッティラ王に対して復讐を遂げ、自らニフルンゲン国の王となるのであるが、ともかくもこうしてアッティラ王、ティードレク、ヒルディブラントを残してニフルンゲン族はことごとく滅びて行ったのである。

以上、『ティードレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説に関する部分を５つに分けてまとめてきたが、１）はジグルトが誕生するまでの両親の物語であり、２）～４）はそのジグルトに関して冒険、結婚、暗殺等を取り扱っており、そのジグルト暗殺後の未亡人グリームヒルトを中心人物としてその復讐等を語ったものが５）である。それぞれは『ヴォルスンガ・サガ』の１)、２）～４)、５）に相当するものであるが、両者の間にはかなりな相違があることが明らかである。このジグルト（シグルズ）とグリームヒルト（グズルーン）を中心にして『ヴォルスンガ・サガ』との比較において『ティードレクス・サガ』の特徴を簡単にまとめると次のようになろう。

まず１）ではジグルトの両親のことが語られているが、ここではジグルトの父ジグムント王は、『ヴォルスンガ・サガ』のシグムンド王のように北欧の主神オーディンには全く結びつけられてはいない。従って、オーディンの意志によって戦死することもない。彼の国タルルンゲンを支配し続けるのである。ここにおいて死ぬこととなるのは父ではなく、逆にその母ジジベの方である。ジグムント王の子供を宿していたジジベは、二人の伯の奸計にあってシュヴァーベンの森の中へ連れ出され、そこで一人の息子を産み落としたあと、その子供の容器が川に落ちたのを見て、気

絶して死んでしまうのである。

一方、2）で語られるその子供ジグルトについても、その子供は雌鹿に救われて、4歳になるまで子鹿たちと一緒に育てられ、その後森の中で鍛冶屋ミーメに拾われ、ジグルトと名づけられて12歳になるまで、そこで養育されるなど、『ヴォルスンガ・サガ』には全く見られない別の伝承が語られている。十分に成長したジグルトがその後悪竜を退治し、鳥の言葉が分かるようになり、ブリュンヒルトを訪ねて出かけてゆくことは、なるほど『ヴォルスンガ・サガ』にも見い出されるあらすじであるが、しかしその行動への動機はもちろんのこと異なっている。悪竜を退治する結果となったのは、すなわち、『ヴォルスンガ・サガ』のように、財宝獲得をもくろむレギンに悪竜退治を唆されたのではなく、逆にミーメが乱暴なジグルトを悪竜に殺してもらおうと企んだことによるのであり、またジグルトがブリュンヒルトを訪ねて行ったのも、『ヴォルスンガ・サガ』においてのように鳥の言葉に従ったのではなく、ミーメに名馬がいることを教わっていたからである。

3）で語られるジグルトの結婚についても、『ヴォルスンガ・サガ』ではギューキ王の妃グリームヒルトによって忘れ薬を飲まされてシグルズがグズルーンと結婚するのに対して、ここではそのようなことは語られていない。もう一つのグンナルの結婚についても、『ヴォルスンガ・サガ』では邪しまな心の母グリームヒルトが息子グンナルにブリュンヒルトとの結婚を勧めるのに対して、ここにおいてはジグルト自身が義兄グンナルにブリュンヒルトとの結婚を勧めるのである。その結婚話を取り決める際にも『ヴォルスンガ・サガ』のようにシグルズがグンナルと姿を交換して炎を越えるといった行動はなくなっている。ただ姿交換のモティーフはここにも伝承されていて、グンナルから事情を聞き知ったジグルトは頭巾をつけてグンナルの代わりにブリュンヒルトの床に入るのである。『ヴォルスンガ・サガ』ではシグルズがブリュンヒルドとの間に抜き身の剣グラムをおいて花嫁の貞操を大切にしたのに対して、ここではジグルトはグンナルの許しを得てブリュンヒルトの処女を奪ってしまうのである。

従って、4）で語られる両王妃口論――『ヴォルスンガ・サガ』ではライン河の中、『ティードレクス・サガ』では広間で展開される――のあとのジグルト暗殺にも違いが生じてくる。『ヴォルスンガ・サガ』では、すなわち、ブリュンヒルドから恥辱を聞き知ったのをきっかけとして、グンナルが黄金に目をつけて、ヘグニの忠告にもかかわらず、グットルムを唆してジグルズを暗殺してしまうのに対して、『ティードレクス・サガ』では結局ジグルトが秘密を暴露して誠実の誓いを破ったという理由で、全員が合意して、彼を暗殺してしまうのである。暗殺の場所も『ヴォルスンガ・サガ』のベットから『ティードレクス・サガ』では森の中へと変わっている。しかもグットルムではなく、ヘグニが暗殺を実行するのである。このように見てくると、『ティードレクス・サガ』の方が『ニーベルンゲンの歌』のあらすじにより近いものであることが明らかであろう。

このことは、5）で語られるグリームヒルトの復讐の物語になるとさらに一層明らかとなる。

『ヴォルスンガ・サガ』では母グリームヒルドの勧めによりグズルーンはいやいやアトリと再婚するのに対して、『ティードレクス・サガ』では『ニーベルンゲンの歌』と同じようにアッティラの求婚（使者オージト）を受けて、グリームヒルトはアッティラと再婚するのである。しかし、いずれの場合にも夫婦生活は睦まじいものではなかった。

数年後グンナル一族を招待する際にも、『ヴォルスンガ・サガ』ではアトリ王がシグルズの黄金に目をつけて、グンナル一族を招待すべく、使者ヴィンギを遣わすのであるが、『ティードレクス・サガ』ではグリームヒルトが先の夫ジグルトの黄金のことをアッティラにほのめかしながら使者を遣わせるのである。従って、一族がフン族の国に到着した際、黄金を要求するのも前者ではアトリ王であり、後者ではグリームヒルトである。このように両者は役割が逆になっているのであり、後者の方が『ニーベルンゲンの歌』に近いことが明らかである。そのあと両民族が対峙することになったときも同様である。『ヴォルスンガ・サガ』のグズルーンは、すなわち、両民族の和解を試みているのに対して、『ティードレクス・サガ』のグリームヒルトは逆に戦いの激化を煽っており、戦いを引き起こすために自らの息子を宴の席に連れ出させるのである。両者の決定的な相違は、結局のところ、『ヴォルスンガ・サガ』のグズルーンはそのあと殺害される兄弟たちのために夫のアトリに復讐をするのに対して、『ティードレクス・サガ』のグリームヒルトは先の夫ジグルトのために兄弟たちに復讐を企ててゆくという点であろう。この点でも後者の方が『ニーベルンゲンの歌』に近いものであることが明らかである。

このように見てくると、『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』に近い比較的新しいニーベルンゲン伝説を含んでいることが理解できよう。渡河の場面や辺境伯ロッディンゲイルのもてなしの場面ばかりではなく、両民族の戦いの描写[14]に関しても、『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』と同じような経過を辿っていて、より詳しく語られてもいる。ここから両者は同類の素材を用いたであろうことが推定されるわけであるが、しかし、もちろん両者には相違点もある。最も著しい相違点は結末部分であろう。ティードレク（ディエトリーヒ）がヘグニ（ハゲネ）を捕えて王妃の前に連れてゆく点では両者に共通しているが、しかし、『ティード

14）ここで『ティードレクス・サガ』における第二日目の戦いの場面を整理しておくと、次の通りとなろう。先に記した戦士がニフルンゲン族であり、後の戦士がフン族である。なお、それぞれの戦いで敗れた方に下線部を施しておく。
①まずゲルノーツがブロドリーンを倒す。
②ヘグニが二度にわたる戦いでイールンクを倒す。
③ギーゼルヘルがロディンゲイルを倒す。
④フォルケールはティードレクによって倒される。
⑤ゲールノーツはヒルディブラントによって倒される。
⑥さらにギーゼルヘルもヒルディブラントによって倒される。
⑦最後にヘグニはティードレクによって捕えられ看護を受けるが、深傷のために翌日死ぬ。
なお、グンナルは戦いの最初にオージトによって捕えられ、蛇牢にて死ぬことになっている。またクリエムヒルトは兄弟たちの口に燃え木を入れて生死を確かめるが、この無残な行為のためにディートリヒによって成敗される。

レクス・サガ』ではそのあとディートリヒは深傷を負ったヘグニのために看護をさせることになっていて、グリームヒルトはヘグニを殺さないことになっている。ヘグニは戦いで受けた深傷のために翌日死ぬこととなるのである。ヘグニを自らの手で殺さない代わりにグリームヒルトは倒れているゲールノーツとギーゼルヘルの口に燃えている薪を入れて、その生死を確かめることになっていて、その残虐さによってティードレクによって成敗されるのである。武術の師匠ヒルデブラントによって成敗される『ニーベルンゲンの歌』とは異なった結末であるが、どちらかと言えば、『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの方がより粗野な面を残していると言えよう。ともかくも、『ティードレクス・サガ』はニーベルンゲン伝説の新しい伝説相を伝えていることは明らかであり、より古い伝説相を伝えていて北欧神話化されていた『ヴォルスンガ・サガ』とは反対に、この『ティードレクス・サガ』は低ドイツ的性格の新しい伝説相を伝えるものなのであると言えよう。

Ⅱ.『ニーベルンゲンの歌』の生成過程 ── ホイスラーの発展段階説 ──

前節では北欧への伝承を見てきたが、それでは一体ドイツでは『ニーベルンゲンの歌』はどのような変遷を辿り成立したのであろうか。『ニーベルンゲンの歌』の成立以前には文字の形で伝説が遺されていない以上、我々はそれを推定するしか方法はないわけであるが、しかし、上で述べてきた北欧への伝承等を手がかりとして、アンドレアス・ホイスラーは『ニーベルンゲンの歌』の生成過程を推定できるとして、巻末（図式Ⅲ）に示したような系図を打ち立てたのである。それによると、『ニーベルンゲンの歌』の前史は二本の綱から成り立っている。ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説がそれであるが、『ニーベルンゲンの歌』の特質を探るためには、その二つの伝説の変遷をここで辿っておく必要がある。以下、このホイスラーの発展段階説に基づいて『ニーベルンゲンの歌』の生成過程を明らかにしておこう[15]。

1．ブリュンヒルト伝説

1）第一段階 ── fränkisches Brünhildenlied ──

ブリュンヒルト伝説は5、6世紀のライン・フランケンで初めて生まれたと推定される。それはのちにノルウェーへと移植され、さらにはその植民地アイスランドにも達し、幸い『エッダ歌謡』の形で伝承されているので、その最古の姿態を探り出すことができる。もちろん、北欧の伝承をそのまま受け入れてはならないが、しかし、北欧の伝承を注意深く慎重に考えることでもって、ライン・フランケンの原型を次のように探り出すことができるのである。

15）まとめるにあたっては >>Andreas HEUSLER: Nibelungensage und Nibelungenlied. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1973.<<を使用する。前史に関しての固有名詞の表記はだいたいにおいてホイスラーに従うが、『ニーベルンゲンの歌』における固有名詞については原典の中世ドイツ語に従って表記することにしたい。

ブリュンヒルト伝説の原型

ライン河畔のウォルムスにブルグントの国王たち、すなわちギービッヒェの息子たちであるグンテル、ギーゼルヘルそしてゴトマールが支配していた。彼らの妹は美しいグリームヒルトで、彼らの武術の師匠が残忍なハーゲンであった。

ある日、彼らの宮廷に背丈の高い一人の異国の英雄が、装いも見事に逞しい馬に乗ってやって来た。それはニーダーラインのジグムント王の息子ジークフリートであった。孤児として彼は荒野の中で、ある妖精の鍛治屋のもとで成長し、恐ろしい竜を退治し、その溶けた角質の皮膚で不死身となり、両肩の間の一箇所を除けば、傷つけられえないのである。彼はまた、父の遺産をめぐって争いをしているアルプの領主たち、すなわち、ニーベルンゲン族を打ち殺し、彼らの黄金であるニーベルンゲンの財宝を奪い取った。その財宝を彼は馬に積んでいるのである。

ギービッヒェ一族はその名高い勇士を丁重に迎え入れた。勇士は彼らと痛飲し、彼らとともに戦いにも出かけた。彼らは勇士と血を混ぜて兄弟の誓いを立て、勇士を共同支配者とした。彼らはさらに勇士にグリームヒルトを妻に与えた。こうして彼らは生活を楽しみ、ジークフリートはギッビッヒェ宮廷の支えであり、輝きであったのである。

あるとき、勇敢な乙女ブリュンヒルトの噂が伝わってきた。彼女ははるか北のある島に君臨していた。彼女の黄金に輝く城のまわりには不思議な炎の壁があった。その壁を越えて彼女のもとにやって来る勇士だけに彼女は妻として従う誓いを立てていた。グンテルはこの乙女に求婚しようと望んだ。そこで、道を知りつくしていたジークフリートが彼を案内し、援助することとなったのである。

彼らは4人でラインを下って海に出た。彼らはブリュンヒルトの炎の壁の前に立ったとき、グンテルは馬に拍車をかけて炎に向かって行ったが、馬は後じさりする。そこでジークフリートは自分の馬を彼に与えたが、この馬でもグンテルはその場から進むことはできない。今やジークフリートは彼と姿を替え、自分の馬に乗り、炎に向かって疾駆する。すると大地は揺れ、炎は天に向かって荒れ狂い、沈み、その勝利者の前で消えた。

ジークフリートはブリュンヒルトのもとに入って行き、自らをギービッヒェの息子グンテルと名乗り、彼女を妻にしたいと望んだ。彼女はためらった。なぜなら、その炎の試練に打ち勝つ者があるなら、それはただ一人、竜を殺したジークフリート以外にはないと彼女は思っていたからである。彼女は言う。「あなたはあらゆる者の中でも第一の者でなければ、私に求婚してはいけません。しばしば私は剣を抜いてきましたが、今でも私の心は戦いに向けられています。」しかし、彼は誓いを催促すると、彼女は折れて、自分の夫として彼に挨拶をした。

三夜ジークフリートはグンテルの姿でブリュンヒルトのそばに寝たが、抜き身の剣を二人の間に置いていた。初夜はそのようにする風習であると彼は説明した。

四日目の朝、彼は彼女の手から指環を抜き取った。それから彼は連れのもとに戻り、再びグンテルと姿を替えた。ブリュンヒルトを連れて彼らはウォルムスに帰り、そこでグンテルの婚礼の

酒を飲んだ。ジークフリートはしかし指環を自分の妻に与えて、出来事を彼女に全て話しておいたのである。

彼らは平和のうちに年月を過ごした。あるとき、ブリュンヒルトとグリームヒルトがライン河で水浴びをしていたとき、ブリュンヒルトが河の上流に行った。「私は気高い女性であり、私の夫はあらゆる勇士の中でも第一の者である。すなわち、グンテルは炎を跳び越えたが、ジークフリートは森の猛獣と一緒に生活し、鍛治屋の下僕であった」と彼女は言うのである。グリームヒルトは彼女の思い上がりをあざけってこう言う。「私の夫は竜を退治し、妖精の財宝を獲得しました。そして炎を跳び越えて、あなたのこの指環を奪ったのも私の夫です。あなたがその側女(そばめ)になったその男をあなたはどうして罵ることができるのですか。」

するとブリュンヒルトは蒼ざめ、家に帰り、その晩は一言も口にしなかった。グンテルが二人きりになって彼女に尋ねると、彼女は答える。「私はもうこれ以上生きようとは思いません。なぜなら、あなたがジークフリートに私の寝床を共にさせたとき、ジークフリートは私とあなたを欺いたからです。私は一つの館に二人の夫を持つつもりはありません。ジークフリートが死ぬか、それともあなたか私かのいずれかが死ななければなりません。」グンテルは驚いた。彼はその訴えを信じたが、黙っていた方がよいと思った。彼女は答える。「グリームヒルトは全てのことを知っていて私を辱めます。あなたが私を失いたくないなら、あなたはあの男を片づけなければなりません。国なき騎士としてこの宮廷に来ていながら、今ではあなた方を陰に追いやっているあの男を。彼とともにその幼い子供もこの世から消えてゆかなければなりません。」

グンテルは弟たちを訪れて、ジークフリートは兄弟の誓いを破り、自らの命を失うこととなったことを告げた。ギーゼルヘルは忠告してこう言う。「一人の女性にけしかけられてはなりません。ブリュンヒルトは妹を妬んでいるのです。我々はジークフリートをかかえこんでいる限り、我々に匹敵する一族がどこにいるか私は知りません。」そこでハーゲンが言葉をはさんだ。国王は私生児を養育するつもりなのか、と。ジークフリートがその息子とともに亡き者となれば、自分たちの上に立つ英雄はもはやいない、そのときは自分たちこそニーベルンゲン財宝の持ち主なのだ、と。

そこで兄弟たちは同意した。ハーゲンはその行為を自分が引き受けることを約束した。彼は誓いを交わしてはいなかったのである。そして彼はジークフリートの背中の傷つく箇所を知っていたのである。

ハーゲンとグンテルは狩りの準備をした。5人全員で逞しい猪を追いかけた。その猪に追いつき殺したのはジークフリートであった。それから彼らは喉がかわき、ある小川のところにやって来た。そしてジークフリートは飲むために腹這いとなった。そのときハーゲンが槍を両肩の間に突き刺すと、槍は心臓を貫いた。ジークフリートは死につつ卑怯な裏切り者たちを呪った。彼は妻と防ぐすべも知らない子供のことを思って嘆いた。殺害者たちは歓声を上げて喜んだ。午前中の間彼らは猪を追ったが、今やより強い獣を射止めたのである。

彼らはその遺体を積み込み、夜になって帰宅した。彼らはグリームヒルトの部屋をこじあけ、死体を寝ている者のベットの中に投げ込んだ。彼女がその血で目覚めたとき、彼女は叫び声を上げたが、とても耳をつんざくような声だったので、棚の上の水差しがガチャガチャ鳴り、宮廷のガチョウが金切り声を上げたほどであった。広間のブリュンヒルトはその叫び声を聞いた。そこで彼女は、最後に、館全体が鳴り響くほどに、大きな声で笑った。「あっぱれ、皆様、今や誰もあなた方の支配を否定なさいますまい！」一方、グリームヒルトは、兜と楯が打ち砕かれてはいなかったので、これは卑怯者の成せる殺害だと見てとった。そこで彼女は殺害者たちに向かって不幸を叫んだ。しかし、国王たちは勝利に歓びふけって夜ふけまで酒宴を張った。

朝早くブリュンヒルトは家の者たちを自分のベットの前に呼んだ。そして泣きながら彼女は彼らに事実を打ち明けて言った。すなわち、ジークフリートは誓いを交わした兄に対して誠実を忠実に守った。彼の抜き身の剣が寝床を分けていたのだから。グンテルの方こそ彼の誓いを忘れていたのだということを。「あなた方にとってよいことであれ、悪いことであれ、私の生は終わりました。欺きでもってあなた方は私を手に入れたのです。悪からは悪が生じたのです。」そして彼女は自分の剣を脇腹に突き刺したが、それを誰も止めることはできなかった。

このような内容のブリュンヒルト伝説が５、６世紀にライン・フランケンで生まれたと推定されるわけであるが、この伝説が生まれた背景にはどのような歴史的事実が関与していたかについては、断言できるものはない。プロコープの『ゴート戦争（Ⅲ，１）』の中に読み取られるゴート族に関する歴史的事実が指摘されうるかも知れないが、ともかくもこのブリュンヒルト伝説は当時の上流社会から純粋に考え出された魂の闘争を内容とするものであり、その内的戦いの悲劇的主人公がブリュンヒルトである。従って、グリームヒルトはここではまだ副主人公である。彼女の課題は、とりわけ川の中での口論によって欺きを明らかにし、復讐を呼び起こすことの中にある。さらに彼女はジークフリートと兄弟たちとの間の絆を強固にし、傷つけられた女性の感情の中に嫉妬の余韻をもたらす役割を演じているが、ジークフリート暗殺後彼女はどうなるのか、その後の彼女については語られていない。この伝説は結局のところジークフリートの死を中心としたブリュンヒルトの伝説であり、その魂の闘いを内容とするものなのである。

この伝説は、『ヒルデブラントの歌』などから推定されるように、頭韻の歌謡であり、夕方、中央の土間で火を炊いている従者たちが盃を交わしつつ痛飲している間に、スコープと呼ばれる宮廷詩人が主君広間で朗読して聴かせたもので、約15分間で終わる簡潔な歌であった。しかし、文字に写して残すことを詩人たちは考えていなかった。こうして歌われていたこの伝説歌謡はのちに、遅くとも９世紀の初めにはスカンディナビアへと伝承され、それがさらにはアイスランドへも伝承されることとなるのである。

ブリュンヒルト伝説第一段階はこうして北欧へと伝承されていったのであるが、その後のドイツでは９、10世紀の経過中、英雄文学は頭韻から脚韻へと変わった。この脚韻はローマの賛美歌

に由来するもので、当初はかなり単調な形式であったが、歳月とともに言語が次第になだらかになって二行の脚韻長詩句を発生させた。こうした転回は吟遊詩人によって促され、彼らはスコープと呼ばれた宮廷詩人に代わって英雄文学を保護したのである。それはなるほど戦士貴族から民衆への降下であったが、聴衆や後援者の好みはなおも英雄的なものに傾いていたので、素材は騎士時代に至るまで古代的で厳しいまま変わらなかったのである。そして英雄伝説はこうして久しく吟遊詩人の歌謡であったのである。

2）第二段階 —— Jüngeres Brünhildenlied ——

ブリュンヒルト伝説の原型に次の段階としての変化が生じたのが12世紀になってようやくである。もちろんその作品はドイツには遺されていないが、アイスランド人によって1250年頃古ノルト語の散文で書き留められた『ティードレクス・サガ』を常に『エッダ』及び『ニーベルンゲンの歌』と比較考察することによって、我々はドイツにおけるブリュンヒルト伝説の第二段階をかなり正確に推測することができるのである。

この段階においてギービッヒェ（Gibiche）やギービッヒュンゲ（Gibichunge）という名は消失し、国王とその国民はライン地方の発音に従ってブルゴント族（Burgonden）と呼ばれ、ゴトマール（Gotmar）はゲールノート（Gernot）に、グリームヒルト（Gimhild）はクリエムヒルト（Kriemhild）に移された。

名前だけではなく、あらすじにおいても改作を見た。なかでも深く改作されたのがブリュンヒルトに関する事柄である。炎越えと姿交換といった超現実的なあらすじは当時の人々にはもはや受け入れがたいものとなり、求婚試みとしてはそれに代わって石投げ、幅跳び、そして槍投げの三種競技が取り入れられた。それでもって成り行きは以前よりはより現世的となったのである。

この変化によって婚礼初夜の剣の場面はなくなった。しかし、それを無造作に削除するわけにはいかなかった。証拠として指環を見せてクリエムヒルトの口から出る「側女（そばめ）」という非難のためである。そこで付け加えられたのが次のようなあらすじであろう。すなわち、彼女は結婚の夜、グンテルを拒む。猿轡をかませる。ジークフリートはまたもやグンテルに手助けをするのである。ジークフリートはグンテルの許しを得て、グンテルの夜衣裳を着て寝床へ行き、その強い女性と格闘し、彼女から処女とともに超女性的な力を奪い取ってしまうのである。

この宿命的な改作はさらに婦人たちの口論とグンテルの前での嘆きにも影響を及ぼした。「ジークフリートは私とあなたを欺いたのです」というブリュンヒルトの嘆きは、もはや意味を持っていなかった。グンテルは自分が欺かれたのではないことを知っており、彼自身がブリュンヒルトへの欺きを欲していたからである。だから、今や重点が置かれるようになったのは、ジークフリートは秘密を不実なものにした、そしてクリエムヒルトは証拠を突き出して義姉を侮辱したという点である。従って、婦人たちの口論は、もはや川の中ではなく、にぎやかな舞台、すなわち、広間の中で起きる必要があった。ブリュンヒルトは苦情も復讐の要求も、夫との密かな対

談ではなく、ハーゲンのいるところで申し立てる。婦人たちの口論は宮廷的な出来事となり、名誉の座をめぐっての戦いとなったのである。　従って、そのあとの結末も変わってくる。人々の前でのブリュンヒルトの辱しめはジークフリートの死でもって償われたのだから、ブリュンヒルトの別れの言葉、すなわち、死んだジークフリートを中傷から拭うためのかつてのおごそかな結末の文章は消失した。その代わりに、『ティードレクス・サガ』で伝承されているような結末を恐らくドイツの吟遊詩人は詩作したのであろう。すなわち、ブリュンヒルトは帰ってくる狩人たちを出迎え、よい獲物を射止めたことの祝いの言葉を述べ、その死体をクリエムヒルトのベットの中に投げ込むように要求する。「彼女は今や彼を死人として抱くがよい！」これが歌謡におけるブリュンヒルトの最後の語りであったのであろう。十分英雄的であり、憎しみに満ちた復讐女性にはふさわしい。かつての深い魂の闘いは消失したのである。未亡人の悲しみの叫びに対する返事としてのブリュンヒルトの高笑いも消失し、それに代わって目立ってくるのがクリエムヒルトの嘆きのさまである。かつてはブリュンヒルトが占めていた結末をこの第二段階の歌謡においては、このクリエムヒルトが占領してしまうのである。しかし、クリエムヒルトはブリュンヒルトに代わって結末だけではなく、最初の場面をも占領してしまった。すなわち、彼女は母オーデに、美しい鷹が二羽の鷲に引き裂かれてしまったという夢を語るのである。この冒頭部分はすぐさま新しい女性の伝説を明らかにしているのであり、反対にブリュンヒルトはより小さく、より表面的となったのである。

このような内容の第二段階の歌謡は、第一段階のものの約二倍の長さのものであり、その語り方法においてはよりゆっくりしたものであったろう。母オーデ以外には新しい人物を登場させず、また饗宴のような宮廷的描写も展開させることもなく、あらすじはほっそりと静かに前へ進んでいった。それは相変わらず、吟遊詩人がその記憶から朗読したまさに「歌謡」であり、詩形も二行の脚韻長詩句であった。

このような「歌謡」はライン地方のフランケン人で、フランスの詩を知っていた教養のある吟遊詩人によって詩作されたのであろう。フランスの詩や騎士的な鷹の夢などから12世紀末がほのめかされるが、しかし、その他の箇所では第一段階の原型から伝えられたものであり、古代的生活様式、粗野で悲劇的な精神の多くは保持されたのである。こうした第二段階のブリュンヒルト歌謡が数年後ドーナウ地方の『ニーベルンゲンの歌』の詩人の手に渡って、その前編の直接の原拠となったのである。

2．ブルグント伝説

1）第一段階　── fränkisches Burgundenlied ──

それでは、もう一つの伝説、ブルグント伝説はどのような状況にあったのであろうか。この伝説の第一段階も、やはり5、6世紀の間にフランケンの英雄歌謡として発生したと推定されるが、この頭韻の歌謡も、ブリュンヒルト伝説と同様、その原型は失なわれている。しかし、それはノ

ルウェーやアイスランドに伝承されてゆき、アイスランドのエッダ歌謡に新旧二つの『アトリの歌』が遺されている。このうち古い方の『アトリの歌』は移住してきた伝説形式に近い形で残されていると言われ、主にこの歌謡を『ニーベルンゲンの歌』と比較考察することによって次のようなブリュンヒルト伝説の原型が得られるのである。

ブルグント伝説の原型

ギービッヒェ一族であるウォルムスのブルグント国王たちは、ジークフリートの未亡人で彼らの妹であるグリームヒルトをフン族の強大な国王エッツェルと結婚させた。彼女は彼から二人の息子エルフェとオルテを儲けた。ウォルムス人たちは多くの財宝を所有していた。それは、ジークフリートの死後彼らの所有となったニーベルンゲンの財宝である。グンテルとハーゲン――ハーゲンはここではギービッヒェ族の三人とは異父兄弟であり、ある妖精と王妃の息子として考えられている――は、その黄金をライン河に隠し、どちらかが生きている限りは、その隠し物のありかを秘密にしておこうという誓いを立てていたのである。

この財宝を手に入れたくてたまらないエッツェルがウォルムスに使者を送り、一族を自分の宮廷に招待したことでもって歌謡は始まっている。使者は広間で宴会の際に自分の委託を伝えた。使者は国王たちに彼の主君からの測り知れない贈物と名誉とを約束したのである。ハーゲンはそれを疑い、やめるよう忠告するが、グンテルは臆病にもその旅に出かけないで過ごすくらいなら、むしろ狼や熊にニーベルンゲン遺産を委ねた方がよいと言った。その異父兄弟ハーゲンに向かってグンテルは、お前はお前の父、とても英雄とは言えない妖精に似ていると言って非難する。そこでハーゲンは怒って旅立ちに従った。

暗い予感に襲われながら四人の国王は少ない従者を連れて出かける。彼らはライン河を越え、力強く漕いだので、櫂と留め杭は壊れたくらいである。その後ハーゲンは船を流れに投じてしまう。帰ることなどは彼は考えていないのである。

フン族国境の向こうで彼らは一人の眠っている戦士に出会った。その戦士はグリームヒルトが、彼女の兄弟たちに警告を与えるために、使いに出していたものである。長い騎行のあと彼は河のほとりで昼夜幾日も見張りをしていたので、つい眠り込んだのである。彼の警告は遅過ぎた。境界は踏み越えられたが、決意は動じなかった。

彼らは国を越えてエッツェルの胸壁の高い城にやって来た。その城は武装者たちでいっぱいであった。彼らが広間へ入って行ったとき、グリームヒルトが歩み寄って言った。「あなたは裏切られたのです、グンテル様！あなたは鎖かたびらもなくそんなにわずかの兵でフン族の陰謀に対してどうされるつもりですか。」

彼らは酒宴を張っているフン族のところに腰をおろした。エッツェルは多くの財宝を要求した。グンテルはそれを反抗的に拒絶した。そこでエッツェルは彼の戦士たちを彼らの中に割って入らせた。最初の突撃でグンテルは捕えられた。殴り合いでギーゼルヘルとゴトマールはほかの者た

ちとともに倒れた。ハーゲンはさらに戦いつづけ、8人のフン族を倒したところで、彼も猿轡をかまされて連行された。

エッツェルはグンテルの前に歩み出て、財宝でもって自分の命を助けるつもりはないかと尋ねた。しかし、グンテルは、宝の隠し場所を漏らす前に、ハーゲンが死んだことを知らなければならないと言った。そこでエッツェルはハーゲンの心臓を切り取らせるために使いを出した。笑いながらハーゲンはナイフに耐えた。グンテルは弟の赤い心臓が深皿の上に載せられているのを見たとき、こう言った。「今はじめて私は確実にニーベルンゲン財宝の持ち主だ。もはやハーゲンは生きてはいないのだから！今や秘密は私一人だけしか知らない。黄金の指環はライン河に沈めておこう。お前たちフン族の手に入って輝くことはあるまい！」

そこでエッツェルは彼を蛇の牢に投げ込ませた。グリームヒルトが彼に差し出した竪琴をグンテルはひるむことなく奏でたが、ついには彼は毒蛇にかみつかれて殺されてしまった。

エッツェルの広間ではフン族が宴会のために集まった。悲しみを押えながら、王妃は、強い酒を食卓に出し、エッツェルにおいしい物を差し出した。それから彼女は彼にこう打ち明けて言った。「あなたが食べたのはあなたの子供たちの心臓です。決して二度とあなたはエルフェとオルテを自分の前に呼ぶことはできません！」彼女は自らの子供を復讐のために殺していたのである。荒々しい戦士たちは泣いた。グリームヒルトだけが涙を流さなかった。彼女は黄金の指環を国王の財宝部屋から取り出して戦士たちにバラ撒いた。戦士たちがうっとりとして眠りこむように仕向けるためであった。エッツェル自身は、酒と恐怖で麻痺してしまい、彼のベットに沈み込んでいた。ここでグリームヒルトは剣を彼の胸に突き刺した。それから彼女は火をつけ、燃える広間の中で彼女は一族もろとも自らの生命をも絶ったのである。

この伝説もまた、ブリュンヒルト伝説と同様に、「歌謡」であったと推定されるが、その伝説の素材は、ブリュンヒルト伝説の場合とは異なって歴史的事実に容易に結びつけられ得る。その伝説の三つの柱として次のような5世紀の歴史的事実が指摘されよう。まず第一は、437年にライン・ヘッセン地方のブルグント族はフン族によって恐ろしい敗北をこうむり、　その国王グンディハリ（Gundihari）は一族とともに倒れたという事実である。しかし、もっと作用を及ぼしたのは、第二の歴史的事実、すなわち、その16年後の453年に、恐れられていたフン族の支配者アッティラ（Attila）が突然の死を遂げたという事実である。彼は夫人ヒルディコ（Hildiko）の側のベットの中で大量の咯血をして死んだのであるが、まさに「このこと」が英雄文学の芽になりえた。すなわち、フランケンの一詩人は、アッティラの殺人者をヒルディコだと見てとって、この二つの歴史的事実を一つに結びつけ、復讐行為、兄弟たちの復讐としたのである。16年という時間的差異は「一日」に圧縮され、グンディハリが倒れた次の日の夜、ヒルディコが兄弟たちの復讐を夫アッティラに対して行うという英雄文学が生まれたのである。さらにその上第三の歴史的事実として、アッティラの息子たち、エルラーク（Ellak）とエルナーク（Ernak）の二人が父の死

後まもなく世を去ったということである。そこからその作品の中に二人の未成年の虐殺が盛り込まれることとなったのである。

ブリュンヒルト伝説の第一段階はブリュンヒルトの内面的な魂の闘争を取り扱うものであったが、このブルグント伝説第一段階は、逆に非常に明るい見せ場を多く持っている。すなわち、前者では二人の人間の間で一つの運命が織り成される密かな場面があったが、後者ではそのようなものはなく、もっと騒々しく、もっと公的な性質のものである。冒頭と中央と結末にそれぞれ置かれている三つの酒宴がそのトーンを決定づけていると言えよう。また両者の結末部分についても、前者はブリュンヒルトの別れの挨拶によって内面的に特徴づけられているのに対して、後者では燃え落ちてゆく広間の描写によって外面的な作用を及ぼす結果となっているのである。

しかし、このような相違にもかかわらず、我々に推定されるこのブルグント伝説はすでにブリュンヒルト伝説にいわば「押し寄せられて」いる。アッティラの殺人者グリームヒルト（歴史上のヒルディコ）はジークフリートの妻と同一視されている。この伝説の軸にあたる財宝もかつてジークフリートが所有していたニーベルンゲンの財宝と同一視されている。この同一視は、独立して生じていたその二つの伝説を結びつけるきっかけであったかも知れない。このように二つの英雄伝説はお互い接近しているが、しかし内的に結びついているのではない。それらは長い間独立的に生じた。恐らくブルグント伝説は460年頃、ブリュンヒルト伝説は580年頃に生じた。そして100年後に二つの歌謡は接触し合い、その名前を借り合ったということはありえよう。そのように二つの伝説は、新しい環境の下に根をおろすまで、ゆるく結びついたままだったのである。

2）第二段階 —— baiwarisches Burgundenlied ——

8世紀以来上部ドイツの文書にはクリエムヒルト（Kriemhilt）、ハグノ（Haguno）、ニプルンク（Nipulunc）、ジークフリート（Sigfrid）という名前が見られるが、これは当時ニーベルンゲン伝説がバイエルン・オーストリアの英雄詩人たちにも知られていたことを証明するものと考えてよいだろう。しかし、ここのドーナウ地方では以前から最も好まれた英雄素材はディートリヒの逃亡伝説であり、エッツェル（アッティラ）が逃亡の君主や英雄の温和な保護者となっている。こうしたエッツェル像は東ゴート人のもたらしたものであった。ところが、フランケン人によって描かれたブルグント歌謡のエッツェル像は、第一段階ですでに述べたように、黄金欲が強く残忍な裏切り者であった。それはバイエルン人には信じられない像であった。そこで彼らに受け入れられるためには、裏切り者エッツェル王の負担を軽くしなければならなかった。この要求に応じてドーナウ地方の詩人によって改作された結果が、すなわち第二段階であるが、これは後の第三段階から推定する以外に方法はない。第三段階から推定して、第二段階には次のような改作が認められよう。

まず最も決定的な改作は、ブルグント族に対する反虐をクリエムヒルトに行わせているという点である。だから彼女はエッツェルの財宝欲望を受け継ぐのであるが、これは合理的なことで

あった。なぜなら、ジークフリートの遺産は彼女に与えられるべきものであるからである。しかし、黄金欲望からのみ彼女は兄弟を殺害するわけにはいかない。もっと強い衝動としてジークフリートのために復讐することとなったのである。グリームヒルトはジークフリートの暗殺を赦し忘れることはできなかった。エッツェルの妻となったのも、その復讐のためであり、今や彼女がそのためにブルグント族を招待することとなるのである。従って、かつてはエッツェルの役割であったものが、今や彼女に移っている。財宝の質問、縛られたものの殺害命令等がそれである。もちろんクリエムヒルトは以前の段階から維持しているものもあるが、しかしそれは新しい気質に従って作り変えられている。かつてはグンテルが悪意もなく、鎧も身につけず広間に入って来たことで、クリエムヒルトはびっくりしたが、今や彼女がびっくりするのは、客人たちが不信の念をもって外套の下に鎧をつけているということである。

こうしてエッツェルに対する復讐がブルグント族に対する復讐へと移ったため、当然のことながら次の改作点としてエッツェルの死が消失した。従って、歌謡の終りの約三分の一、すなわち、ゾッとする宴会、国王を短刀で刺し殺すこと、客殿の人々を焼き出すこと等はなくなったのである。しかし、この結末の三分の一はあっさりとなくなったのではなかった。保持されるべきものは保持されて、それに新しい意味を与えたのである。次の4点にまとめられよう。まず第一は子供たちの殺害である。クリエムヒルトは今やブルグント族に対して復讐を成すのであるから、自らの手で子供たちを殺してその心臓を皿の上に載せて食卓に出す必要はなくなった。しかし、彼女は依然として子供たちを復讐の犠牲にする。すなわち、彼女はハーゲンがその子供を殺すように仕向けるのであるが、これはエッツェルとブルグント族とを敵対させるため、すなわち彼女の復讐のためなのである。この復讐の犠牲という点では同じままである。第二は王妃が黄金をバラ撒くことである。かつてはフン族にバラ撒いて、油断させるためであったが、今やブルグント族に攻撃をしかけるよう刺激するためにフン族の家来たちにバラ撒くのである。第三は広間を焼くことである。かつては罪滅ぼしのために広間を焼いて一族と自らを滅びさせたのだが、今やそれはブルグント族に対する武器となっているのである。しかし、あとにも先にも火をつけるのはクリエムヒルトである。第四はクリエムヒルトの死である。第一段階の広間燃焼においてはクリエムヒルトは自ら刑死を決心した。第二段階においても兄弟たちに復讐を遂げたので、生き延びるわけにはいかない。死ぬことは両者において共通しているが、詩人は他人の手によって殺されることにした。なぜなのか。詩人及びその聴衆の同情は今やブルグント族の方にあった。ブルグント族という名において復讐させるためには、エッツェルもフン族も何の役に立たなかった。新しい人物が必要となった。それがディートリヒ・フォン・ベルンである。

このディートリヒの役割は第二段階の詩人の創作であろう。このゴート族の英雄がどのようにしてこのブルグント伝説に入って来たかは、簡単に説明できる。ディートリヒ逃亡の作品からバイエルンの詩人には、ディートリヒがエッツェルの宮廷に滞在していたということを知っており、このブルグント族滅亡に無関係のままにしてはおけなかったのである。そこでディートリヒには、

できる限り中立の立場をとるが、クリエムヒルトの所業を見るに見かねて、ついには剣を振り上げて、女悪魔を真っ二つに断ち斬るという役割が与えられたのである。しかし、このためにのみ、彼は登場したのでもなかった。彼はブルグント族の最強の者ハーゲンを征服するのであり、それによって英雄行為を称えられていたのでもあろう。ハーゲンがゴート族の英雄を敵にもったならば、そのことはハーゲンをも高めたのである。そして賛嘆されたディートリヒの干渉によって戦いが終わったこの結末は確かに一つの高まりなのである。

ディートリヒのほかにもう一人ディートリヒ伝説からこの歌謡に入ってきた人物がいる。エッツェルの弟ブレーデルがそれである。エッツェルが平和を愛する国王となったからには、フン族の中に別の活動的、攻撃的な勇士が必要となったのである。このブレーデルの役割は、クリエムヒルトの唆しに屈服してしまう最初の人物であり、部下に戦いのため武装させる人物ということにあるが、さらには彼はグンテルを捕え、またハーゲンによって倒されることによってディートリヒに武器を取らせるという重要な役割をも演じているのである。

その戦いの経過は次のように推定されよう。饗宴が始まる前に、ブレーデルは王妃の命令により広間の入口をふさぐ。広間の中ではハーゲンによってエッツェルの息子が首を刎ねられ、それから戦いの雑踏が起こる。そこからディートリヒとともに国王夫妻がのがれ出るが、客人たちは閉じ込められたままである。グンテルはついに捕えられて連行される。クリエムヒルトは夜になってその広間に火をつける。広間の中のブルグント一族は朝になって逃げ出すが、敵の槍と矢の雨にあたって倒れてしまう。ハーゲンだけが戦いつづけ、次から次へと敵を倒してゆくが、その犠牲となった者たちの中には国王の弟ブレーデルもいた。今やディートリヒは傍観しているわけにはいかなくなり、ハーゲンと対決し、彼を征服して、縛り上げて王妃クリエムヒルトに引き渡す。それから財宝の質問が続くのである。

これを第一段階と比較してみれば、なるほどグンテルが縛られ、一族が皆倒れ、最後にハーゲンが捕えられるといったある種の基盤は動じないままであるが、しかし、この場面のあらすじは大変豊かにされている。一つの場面からおよそ六つのあらすじが生じたのである。このことを引き起こしたのがディートリヒとブレーデルというディートリヒ伝説からの新しい二人の人物であり、さらにはまた原型の結末部分からこの場面に移された子供殺害と広間焼きであるが、この豊富化は失われた原型の結末部分の三分の一を埋め合わせてもいるのである。従って、全体の分量は原型とほぼ同じものであったと考えてよいであろう。

饗宴からあとのあらすじはこうして豊かにされているのに対して、饗宴に先立つ招待、旅そして到着の場面はほとんど変更を加えられなかったものと考えてよいが、ただ王妃の母の警告する夢はすでにこの第二段階が付け加えたものであろう。なぜなら、グリーンランドの歌謡の夢の対話はその夢に由来するだろうからである。

最後に、なおも重要な改作はハーゲンがグンテルよりも高められている点である。原型は、歴史的事実に合わせて、グンテルを決定的な英雄として、財宝質問の場面でもあの感銘的な反抗の

言葉をグンテルに語らせたのであるが、この第二段階においてはその逆である。ハーゲンこそが今や最後のブルグント人であり、彼こそが王妃に財宝の秘密を拒み、クリエムヒルトによって殺されるクライマックスの人物なのである。すなわち、ブルグント族滅亡はジークフリートの復讐となったことがここでも明らかである。なぜなら、ハーゲンこそジークフリートの殺害者であったのだから。ハーゲンこそ英雄となったのである。このことによって今や明らかなのは、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説が内面的に結びついているということである。第一段階では、あらすじそのものによってではなく、ただ人物たちと財宝だけによってゆるく結びつけられていたに過ぎなかったが、第二段階においてフン族の裏切りはジークフリートの復讐のためであるという考えが現われるや否や、その二つの伝説は互いに接して生長したのである。この二つの伝説が順番に朗読されたならば、ジークフリートの死は二重奏の転回点として現われたのである。しかし、このことを「一つ」に融合し、互いに釣り合わせることは、それほど簡単なことではなく、この難しい課題がついに成し遂げられるのは第三段階の詩人を経て最後のニーベルンゲンの詩人によってなのである。

ちなみに、形式においてこの第二段階の上部ドイツの詩は、いまだ同時代の『ヒルデブラントの歌』と同じく頭韻であったが、その後脚韻の文体へと移ってゆき、数百年間、その内容を大きく変えることなく、朗読されたのである。

3）第三段階 —— die ältere Nibelungenot ——

こうしたバイエルンのブルグント伝説は、1160年になってドーナウ地方でさらに新しい改作を見ることになった。それはその頃より高度な詩才を有する吟遊詩人によって作り上げられたものであり、この詩人によって初めて、歌いものの詩から6倍ないし8倍の量を有する読みものの叙事詩が発生することとなったのである。『古きニーベルンゲン災厄』（die ältere Nibelungenot）がそれである。もちろんこの最初の叙事詩は現には遺っていない。しかし、それはこの地方でニーベルンゲン詩人の素材となる一方、ザクセン地方にも伝承され、それがさらにのちには（1250年頃）一人の北欧人の手もとにも達して、彼はノルウェーのベルゲンの町にてドイツ語の英雄物語を古ノルト語で書き写したのである。すなわち、『ティードレクス・サガ』がそれである。この作品及びフェロエ島のバラード、デンマークの歌謡『クレモルトの復讐』などから第三段階がかなり正確に再現できるのである。この第三段階によって我々は、中世の隆盛期を形成する騎士と吟遊詩人の時代に入るのである。

まずこの叙事詩の作者は形式を一新した。彼はその頃キューレンベルクの詩人が用いたキューレンベルクの調べと呼ばれた詩形を用いた。それは古い二行の長詩句を二倍にしたもので、本来抒情詩のためのものであったが、第三段階の詩人はそれを読み物としての叙事詩に使用したのである。

しかし、この『災厄』詩人は新しい詩形である叙事詩にこの伝説を盛ろうとしたので、様式の

変化とともに人物や場面をも拡大しなければならなかった。叙事詩への拡大は言語上の膨らみやゆったりとした描写によってのみ成就するものではなく、そのためには文学的感覚を必要とした。彼はその文学感覚をもって、場面と人物たちを新しく創り出していったのである。例えば、エッダの二つの『アトリの歌』はすぐに欺きの使者派遣でもって始まっているのに対して、この叙事詩ではずっと以前の昔にさかのぼって、未亡人クリエムヒルトへのエッツェルの求婚でもって始まっているのである。招待に関してもウォルムスの宮廷での相談の場面が生じ、そこで初めてギーゼルヘルが生き生きとした輪郭をもって登場するのであり、またフン族の国への旅も、ベッヒェラーレンのリュエデゲールのもとに滞在することでもって、新しい重要な拡大を見たのである。

さらにエッツェルンブルクでの滞在も異常なほど豊かになっている。以前の段階ではエッツェルンブルクに到着すると同時に、すぐさま戦いが始まったが、ここでは一連の静かな出迎えの場面が展開されている。すなわち、ディートリヒは客人たちを出迎えに行き、彼らに警告をする。ニーベルンゲン族が行列を作って国王の館に向かっている間、塔や窓辺にはきれいに着飾った婦人たちが立っていて、ハーゲンの不気味な姿に感嘆する。出迎えの広間でクリエムヒルトは家来たちとともに長い三つの歓迎の挨拶をする。エッツェルはハーゲンのことを質問して、昔の日々を思い出す。このようなものは以前の歌謡においては不可能であろう。それは叙事詩人のゆったりとした歩調を特徴づけている。

そのあと詩人は、何も起こらない第一の宴会を展開させている。それはエッツェルを気前よい主人として示し、彼の宮廷の立派さを見せている。ハーゲンとフォルケールの見張りの夜が続いて、そのあと二日目となる。

この二日目にようやく本来の敵対関係が始まる。クリエムヒルトの願い出は、受け継がれたのであるが、三倍になっている。すなわち、ブレーデルを得る前に、彼女は二つの無駄な頼みをエッツェルとディートリヒにするのである。それから第二の宴会となって、争いが勃発する。

この両民族の戦い[16]にも三つの大きな挿入物がある。ゲールノート（前段階ではハーゲン）によるブレーデルの倒死、ハーゲンとイーリンクとの二度にわたる戦い、ギーゼルヘルによる舅

16）『古きニーベルンゲン災厄』における戦いの経過（脚註14参照のこと）を整理しておこう。先に記した戦士がブルグント族側、後の戦士がフン族側であり、下線部が敗北を喫した方である。
①まずゲールノートがブレーデルを倒す。
②ハーゲンが二度にわたる戦いの末イーリンクを倒す。
③ギーゼルヘルが舅リュエデゲールを倒す。
④フォルケールはディートリヒによって倒される。
⑤ゲールノートはヒルデブラントによって倒される。
⑥ギーゼルヘルもヒルデブラントによって倒される。
⑦グンテルは、戦いの最初にブレーデルによって捕えられていたが、ここで殺害される。
⑧ハーゲンは、ディートリヒによって捕えられ、王妃によって殺害される。
なお、クリエムヒルトはこのあとディートリヒによって成敗される。

リュエデゲールの悲劇である。さらにハーゲンとディートリヒの斬り合いの前の最後の嵐は、個々の像にバラバラになる。すなわち、フォルケールとヒルデブラントという二人の新たに導入された戦士が目立ってくる。取っておかれたゲールノートとギーゼルヘルも目立ってくる。その後の財宝の質問とクリエムヒルトの死は、第二段階からそのまま移されたものであるが、ともかくこうしてエッツェル王のもとでの滞在は拡大によって重苦しい歓迎から虐殺へと移って行くことができたのである。

このような多くの場面は、もちろん新しく創作された「人物たち」を支えとしている。母ウオテ、渡し守、ドーナウの妖精、辺境伯夫人ゴテリントとその娘、フン族の兵士たちはそれほど重要ではないが、より重要なのは、ライン側ではフォルケール、フン側ではヒルデブラント、イーリンクそしてリュエデゲールである。しかし、前段階にすでに登場するゲールノートもギーゼルヘルも『災厄』詩人による重要な創作人物と言ってよいだろう。『災厄』詩人が初めてその二人の名前だけの登場ではなく、重要な役割を演じさせているからである。これら6名を『災厄』詩人は前段階の4名（グンテルとハーゲン、そしてブレーデルとディートリヒ）に加えて、全部で10名としたのであったが、両陣営にそれぞれ5名ずつという賢明な計画に従って配置されたのである。しかも死ぬ順番を見るがよい。まずフン族のブレーデルが死に、ついでチューリンゲンのイーリンク、そのあとリュエデゲール、そしてラインのフォルケール、最後にラインの国王たちゲールノート、ギーゼルヘル、ついにグンテルそしてニーベルンゲンの頼みの人ハーゲンという順序で死を遂げるのである。最後まで一つの確かな上昇を表わしているのである。このように第二日目の戦いは、第一日目の戦いの対型として構成されていて、友人同志の戦い、残忍な運命の意志として我々の心を揺さぶる戦いのために取っておかれたのである。以上のような方法で、今や第三段階は一つの読み物の叙事詩へと拡大されていったわけなのである。

このような第三段階の叙事詩がやがてドーナウ地方のニーベルンゲンの詩人の手に渡って、もう一つの素材であるブリュンヒルト歌謡と結び合わされて、今や『ニーベルンゲンの歌』が成立することとなるのである。

3．『ニーベルンゲンの歌』の成立

1）ブリュンヒルト伝説第三段階

では、そのように二つの素材を一つにした際、ニーベルンゲンの詩人はどのような改作を行ったのであろうか。まずブリュンヒルト伝説第三段階においては、ジーフリトは、生い立ち等の点で改作を施されて、『ニーベルンゲンの歌』ではもはや両親なき私生児ではないとされている。すなわち、前段階まで伝承されてきたように、荒野の中で、ある妖精の鍛冶屋のもとで成長するのではなく、父ジグムントの宮廷で全くの輝きの中で成長するのである。だから彼には今や一定の国が与えられた。ニーデルラントという国がそれであり、ジーフリトは今やそこの宮廷ザンテンの騎士的王子なのである。

そのザンテンの王子ジーフリトはブルゴントの国へ出かけたときも、以前の段階のようにすぐさまクリエムヒルトと結婚するのではない。ジーフリトの結婚がもはや最初に起こるのではなく、プリュンヒルトへの求婚の旅のあとようやく、グンテルの結婚と一緒に起こるという点が主たる大きな改作点である。これまでの段階ではウォルムスに到着後ただちにジーフリトとクリエムヒルトの結婚が成立したのであるが、今や最終段階においてはジーフリトはクリエムヒルトの愛を勝ち得るためには、グンテル王に援助しなければならない。従って、ジーフリトは今や数百詩節の長きにわたって求婚する求婚者である。彼がウォルムスにとどまり、ザクセン戦争にも参戦し、イーゼンシュタインへの旅にも助力するということは、全てジーフリトがクリエムヒルトにいかにふさわしいかということを示している。ブリュンヒルト伝説は今や、騎士時代の興味にふさわしく、愛の物語となったのである。

こうしてジーフリトはもはや鍛治屋で成長する孤児ではないのだから、のちの両王妃口論における「ジーフリトは鍛治屋の下僕であった」という言葉には全くの根拠がないことになる。しかし、詩人はその種の言葉なしで済ますことはできない。何とかプリュンヒルトにジーフリトのことを身分の違うものとして罵ることができるようにさせなければならない。そこで創り出されたのが、イーゼンシュタインのプリュンヒルトにジーフリトをグンテル王の家来だと見せかけるという新しい根拠づけである。こうしてジーフリトはグンテル王の家来としてグンテル王に援助するわけであるが、これによって、「クリエムヒルトは家来を夫に持っている」というプリュンヒルトの叱責が根拠づけられたのであり、詩人はこうして受け継がれた諸関係を新たに基礎固めしたのである。従って、プリュンヒルトの涙は、詩人によって苦しまぎれではあるが、身分違いの結婚によるものとして説明されえたのである。

さらにもっと深くあらすじの内部に入り込んでいる改作は、結婚式当日の寝室場面であると言えよう。前段階ではグンテル王はジーフリトにプリュンヒルトの身体については全ての権利を認めていたのであったが、これはニーベルンゲンの詩人及びその騎士的・宗教的聴衆にはもはや耐えられないものであった。当時の聴衆の感情によれば、グンテルは、自分の花嫁プリュンヒルトがジーフリトに愛されるのを見るよりは花嫁が殺されるのを見るのがよい（Vgl. Str. 655）のである。だから今やジーフリトはグンテル王のいるところで、隠れ蓑で身を隠し、乙女と格闘し、彼女を打ち負かせてグンテルに譲り渡すというあらすじの展開に改作されたのである。

プリュンヒルトは処女としてグンテルに引き渡されるという限りにおいては原型（第一段階）と同じになったわけであるが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』におけるこの改作は、のちの王妃たちの口論に大きな影響を残している。「あなたはジーフリトの側妻（そばめ）だ」というクリエムヒルトの言葉は、前段階から受け継がれたものであるが、これをニーベルンゲンの詩人は、上で述べたプリュンヒルトの罵りの言葉と同様、なしで済ませることはできなかった。しかし、このクリエムヒルトの言葉は事実ではなく、今や中傷であり、プリュンヒルトの復讐の動機はただ一つ人々の前で辱しめを受けたということだけである。従って、王妃口論の場面も、原型のようにライン

の川の中でもなく、また第二段階のように王位の広間でもない。それは騎士たちの競技を見るときに始まり、決定的な罵りは教会の入り口のところで、すなわち、神への祈りの前後に口にされるのである。

この侮辱によってジーフリトが暗殺されることになるのであるが、グンテルはこの暗殺の際には前段階よりももっと意志がなく、それに代わってハゲネがもっと以前よりも多く行動の唯一の煽動者であり、推進者となっている。ジーフリトに対して復讐が成されるべきであるという言葉も、最初ハゲネの口から出るのであって、もはやプリュンヒルトの口から出るのではない。詩人はグンテルにはあまり関心を寄せておらず、彼には諌止する役割を割り当てているくらいである。「あの人（ジーフリト）は我々の祝福と名誉のために生まれてきたのだ」（Str. 872, 2）という言葉は、866詩節の警告の言葉とともに、ギーゼルヘルの言葉に属していたが、それは今やニーベルンゲンの詩人によってグンテルの言葉に移されているのである。詩人がグンテルの負担軽減をねらっていることは明らかである。グンテルとはクリエムヒルトはのちに実際和解することになるが、ハゲネとは決して和解しないのである。詩人は、ハゲネが断固としてその行為を自分に担う後編のことを前もって考えているのである。

ハゲネが復讐の推進者となることによって、グンテルと同様に背後に隠れる結果となっているのがプリュンヒルトである。前段階においてプリュンヒルトは狩りの前にハゲネと二人だけで話し、狩りのあとの出迎えの場面においても祝辞を述べたのであったが、これらは意味深長に削除されているのである。ことに第二の場面は、プリュンヒルトにとって重要であった。すなわち、その場面は、その行為の創始者たる彼女を再度前景へ出させ、クリエムヒルトが悲しみでもって言葉を言う前に、プリュンヒルトに締めくくりをつけさせたのであった。ところが『ニーベルンゲンの歌』ではプリュンヒルトが小おどりして喜ぶ場面がない。全てが終わったあと、ようやく100詩節あとに、2、3の色あせた詩行（Str. 1100）で、クリエムヒルトの悲嘆に関連づけてプリュンヒルトの傲慢さとその冷たさが指摘されているだけである。今や『ニーベルンゲンの歌』においては、プリュンヒルトはグンテルの前での彼女の訴え以来、言葉も話さずに、もはや舞台に登場しないのである。「そのことをプリュンヒルトが勧めたのだ」というようなわずかの指摘が残っているだけである。しかし、このプリュンヒルト像の貧困化を叙事詩人の知識不足だと解してはならない。詩人はよく知っていたのであるが、意識的にプリュンヒルトを退場させたのである。今やジーフリトの死の文学は、すなわち、もはや最初そうであったプリュンヒルトの悲劇ではない。重心はクリエムヒルトにずらされたのである。

『ニーベルンゲンの歌』における改作の多くはこの目的に向かって作用しているのである。なるほどブリュンヒルト伝説が第一段階から第二段階へと移った際に出会ったような根本的な変動は起こらず、外面的な輪郭はほぼ残ったままであるが、しかし、意味、伝説の魂は新しいものとなっていったのである。アイスランド文学においてはプリュンヒルトがますます重要になっているのとは逆に、こうして『ニーベルンゲンの歌』においてはクリエムヒルトに重心が移されたの

である。

2）ブルグント伝説第四段階

では、後編においてはどうか。まずニーベルンゲンの詩人は、地位あるいは気質に従って「登場人物たち」のいくらかを違ったふうに描いている。「ギーゼルヘル」は、やっと武器を持つことのできる年齢に達したという少年ではなく、また「ハゲネ」ももはや妖精の子、すなわち、ブルゴント国王たちの異父兄弟ではなく、彼らの家来となっている。これらは前編と後編を結びつけるために、前編に従ったものであるが、特にハゲネの場合は人間的なものへ近づけて気高くすることにも役立っている。かつて妖精が上品な王妃ウオテを強姦したという考えは、ニーベルンゲンの詩人には不愉快であったに違いない。「彼の顔は灰のように青ざめていた」という妖精の子としての外面は、選り抜きの戦士の観念には矛盾した。ハゲネを妖精の子だと罵ることは、騎士であるディエトリーヒにはもはやふさわしくはなかった。クリエムヒルトの復讐も、それが血縁関係でない家来に向けられるとき、よく理解できるものであり、より人間的であり、またニーベルンゲン忠誠がその荘厳さを得るのも、ハゲネが兄弟のときではなく、家来となったときはじめてなのである。

文字通り気高くされているのが「フォルケール」である。フォルケールは『災厄』詩人によって吟遊詩人として創作されていたが、『ニーベルンゲンの歌』の詩人は彼を自ら三十名の家来を旅に連れてゆく主君へと高めた。その際彼にやはりバイオリンを持たせ、かつては見張り人であったフォルケールに、芸術家として従事するということをも詩作した。フォルケールはさらにベッヒェラーレンに現われ、その婦人の前で甘い調べをバイオリンで奏で、彼女にその歌を歌って聞かせるのであり、彼は歌う抒情詩人であり、ミンネゼンガーなのである。

内面的に気高くされているのが「エッツェル」である。前段階ではクリエムヒルトは少なくともまだ、ブルグント族の財宝でもってエッツェル王を誘惑し、復讐の味方をするように彼を仕向けることができたが、ここではそれらは削除され、今やエッツェルは不実という嫌疑をかけられることはない。両民族の戦いとなったときも、エッツェルは、前段階では遠くから攻撃を指揮し、戦いに火をつけていたと言えるのであるが、ここではもっと柔らかく、もっと悲しげなままである。5世紀の最も強力な戦士領主アッティラ（エッツェル）がここにおいてどのような像で終わっているかは、注目すべきである。

「クリエムヒルト」は、なるほど前段階と同様に復讐魔のままであるが、しかしそれでも彼女には「気高くする」改作が施されている。ブルグント伝説第一段階においてエッツェルへの復讐者であったクリエムヒルトは、第二段階より兄弟たちへの復讐者となったが、その際彼女の行動には二つの衝動があった。すなわち、一つはエッツェルに代わって受け継いだ財宝への欲望であり、もう一つは第二段階において創られたジーフリトのための復讐である。この二つの衝動はいわば競い合っていたが、ニーベルンゲンの詩人は二箇所以外ではそのクリエムヒルトの財宝欲望

を揉み消しているのである。さらに彼女の子供の死についての罪もクリエムヒルトから取り去られているが、このことはあとで述べるほかの包括的な改作と関係があるのである。

「リュエデゲール」の悲劇的役割については、すでに前段階の詩人が豊富に深く実行していた。しかし、リュエデゲールは『古きニーベルンゲン災厄』ではまだエッツェルの仲人ではなかった。『災厄』では王弟ブレーデルがその役目を果たしていたと推定されるが、そのブレーデルの役目を今や『ニーベルンゲンの歌』ではその誓いでもってリュエデゲールが果たすのである。この誓いは新しいものをもたらした。今や重要なのは、家来服従とエッツェルへの恩義ばかりではなく、誓いの誠実さ、王妃との結びつきもまたそうなのである。それは精神的な深化であり、同時にそれはクリエムヒルトの役割を強めてもいるのである。

これら一連の新しく整えられた主要人物に最後には「ディエトリーヒ」も属するが、彼についてはあとで述べられるはずである。

こうして主要人物たちには前段階とは違った色合いが付け加えられていったわけであるが、出来事の点で主な改作を施されたのは、まず「エッツェル王の息子殺害」である。ニーベルンゲンの詩人はここで大胆に創造的に前進したのである。前段階では次のように語られていたであろう。クリエムヒルトは、すなわち、王弟ブレーデルを戸外のブルグント族と戦わせるよう仕向けたあと、主君たちとともに広間での饗宴の席につく。彼女は6歳の子供 —— 名前は恐らくオルテ（Orte）であったろう、のちにはオルトリエプ（Ortlieb）となるのである —— を唆して、ハーゲンの頬を平手でなぐらせる。「母の仕業だな」と言うや否や、ハーゲンはその子供の首を落として、母親の胸もとに投げつける。「これが、その子供を育てた報酬だ」と言って、ハーゲンはさらにその保育官の頭をも刎ねる。これによって両民族の戦いとなり、エッツェル王は自分の家来たちを呼び寄せて戦わせる。戸外でブルグント族を倒したブレーデルは、戸口をふさぎ、フン族を広間から出させる。ブルグント族は広間の中から逃げ出そうとするが、それをブレーデルが阻むのである。

このように語られていた手本をニーベルンゲンの詩人が改作するには4つの理由があった。まず第一に、小さな王子の平手打ちはあまりにも非宮廷的であった。第二に、母親が意識的に子供を犠牲にさらすことはあまりにも非人間的であった。第三に、詩人は戸外での大量虐殺をダンクワルトの名誉ある行為にするつもりであった。すなわち、新たに創作された人物のダンクワルトは、ブレーデルを打ち殺し、虐殺から免れることになっていたのである。このことは、第四の理由と結びついている。すなわち、第四に、詩人はその広間の戸口での戦いにおいてはニーベルンゲン族を目立たさせて、彼らを賛美しようとしているのである。この4つの理由からその場面は次のように改作されたのである。すなわち、クリエムヒルトはその子供を広間に連れて来る。エッツェルはその子供を叔父たちに紹介して言う。「この子は、大きくなったら、そなたたちの援助者となろう。」これに対してハゲネは「この若い王子は短命のように思われる」と言う下劣な返事をする。国王たちは驚く。このとき、戸口にダンクワルトが現われて、ハゲネに向かって叫ぶ。

「兄上ハゲネよ、あまりにも長くすわっていなさる。味方の騎士や従士は殺されましたぞ」と。これを聞くや、ハゲネは行動を起こして、王子の頭を斬り落とすのである。今や平和は解約され、破滅へとひた走りに駆けるのである。

この場面は前段階では粗野な性質のものであったが、ここでは王子の頭を刎ねるというハゲネの行為は宿命的な大きさにまで高められ、全く新しい嵐のような緊張に吹き荒れているのであり、これは、ニーベルンゲンの詩人に成功した最もドラマチックな瞬間であると言えよう。しかもその際王子の頭は、前段階のようにハーゲンによって投げつけられるのではなく、ハゲネの一撃によって母親の膝もとに飛び落ちるのである。保育官を殺す際の「これがその報酬だ」というハゲネの粗野な言葉も、ここではもはやハゲネの口から出るのではなく、詩人の客観的な叙述（Str. 1962, 4）において語られているだけである。

このように広間の戸口でブルゴント族が目立つことによってニーベルンゲンの詩人には一つの課題が生じてきた。エッツェルとクリエムヒルト、ディエトリーヒとリュエデゲールは、その広間の中で倒れてはならず、ブルゴント族の承諾でもって無傷のまま戸外へ出る必要があるのである。これをニーベルンゲンの詩人は「ディエトリーヒのとりなし」によって達成する。怯えたクリエムヒルトは、すなわち、ディエトリーヒに助けを求める。彼はグンテル王と言葉を交わして、広間から外へ出る許しを得る。今やディエトリーヒは王妃を小脇にかばい、また他の側にはエッツェルを護りながらその場を抜け出す。彼のあとリュエデゲールも退却の自由を得る。しかし、一人のフン族が一緒に出てゆこうとすると、フォルケールはその首を刎ねてしまうのである。

このような場面はこの作品の中にあるだけであって、以前の段階にはどこにも見い出されない。ここでは、騎士たるブルゴント族の賞賛もさることながら、とりわけ賞賛されているのがディエトリーヒの偉大さである。ディエトリーヒは、前段階ではただ静的な役割しか与えられていなかったが、ここでは彼の偉大な力は戦闘を「終わらせる」のであり、これでもってニーベルンゲンの詩人は作品の結末におけるディエトリーヒの登場の基礎固めをしているのである。「ディエトリーヒのとりなし」は重要な改作であることが明らかであろう。

そのあと新たに始まるより激しい戦いの場面でも「英雄たちの対決」において改作が施されている。前段階では両陣営ともに5人の戦士を配置して、よく考え抜かれた対決（脚註16参照）を生んでいた。それをニーベルンゲンの詩人は、さらに6名の戦士に名前を与え導入することによって、新たに組み立てたのである[17]。

17）『ニーベルンゲンの歌』における戦いの場面についても、その経過を整理しておこう。先に記した方がブルゴント族、後がフン族であり、下線部が敗北を喫した方である。なお、（ ）内は全くの新しい創作部分である。

①ダンクワルトがブレーデルを迎え撃つ。

②ハゲネが二度にわたる戦いの末イーリンクを倒す。

（フォルケールがイルンフリトを倒す。）

（ハゲネがハーワルトを倒す。）

その6名のうち、ディエトリーヒの家来ウォルフハルトとハゲネの弟ダンクワルトは重要な意味を持っているが、そのほかの残りの4名はむしろ埋め草である。すなわち、ヘルプフリーヒはダンクワルトの殺害者であり、イルンフリトとジゲスタップはフォルケールの犠牲となり、ハーワルトはハゲネの犠牲者となるだけである。

それよりも重要なのは次のような改作である。すなわち、前段階において若きギーゼルヘルが舅のリュエデゲールを殺害する役目を担っていたが、『ニーベルンゲンの歌』ではそれが彼の兄ゲールノートに移されている。これは容易に感じ取られる緩和の一つである。しかし、リュエデゲールが客人に贈った武器によって倒れるという前段階の英雄主義的考えは保持されていて、この贈物をニーベルンゲンの詩人はギーゼルヘルからゲールノートに移しているのである。そして二人は相討ちでともに倒れるのであるが、ゲールノートがリュエデゲール自身によって死の一撃を得るならば、このことは、リュエデゲールを戦士としてたたえ、武術の師匠ヒルデブラントの手よりもより気高い手によってゲールノートを死なせるという二重の効果を持っているのである。

一方、ギーゼルヘルもまた、もはやその年老いたヒルデブラントによって血を流すべきではない。ギーゼルヘルは戦い相手として若い熱血漢ウォルフハルトを得て、同様に相討ちとなってともに倒れるのである。より新しいパートナーを見い出したのである。

従って、ヒルデブラントにはもはやゲールノートとギーゼルヘルを倒すという役目はなくなったが、それは、彼が最後にクリエムヒルトを殺害する役目を与えられていたので、すでに好都合なことであった。ゲールノートとギーゼルヘルの代わりに、ヒルデブラントの犠牲となったのはフォルケールである。

このフォルケールは今まではディエトリーヒによって倒されることになっていたが、このことはニーベルンゲンの詩人には地位上の不調和だと感じられた。しかし、それよりもより強い理由があった。ニーベルンゲンの詩人は、ブルゴントの二人グンテルとハゲネだけが生き残っているときにようやく、ディエトリーヒを登場させようとしているのである。

グンテルは前段階の叙事詩においてはエッツェル王の弟ブレーデルによって捕えられてクリエムヒルトの前に連れて行かれ、そのときから最後の財宝質問の場面で、刎ねられた首が運ばれてくるまで、我々の視野から消えたままであったが、ブルゴント国王グンテルが一番に戦場から退場することは、ニーベルンゲンの詩人には納得がいかなかった。さらにフン族のブレーデルはグンテルを取り押さえるにしてはあまりにも身分が低かった。身分感情と芸術的必要性がニーベル

③④ゲールノートとリュエデゲールが相討ちでともに倒れる。
（フォルケールがジゲスタップを倒す。）
⑤フォルケールはヒルデブラントによって倒される。
（ダンクワルトはヘルプフリーヒに倒される。）
⑥ギーゼルヘルはウォルフハルトと相討ちでともに倒れる。
⑦グンテルは、ディエトリーヒによって捕えられ、王妃の命令で殺害される。
⑧ハゲネは、ディエトリーヒによって捕えられ、王妃自身によって殺害される。
なお、クリエムヒルトはこのあとヒルデブラントによって成敗される。

ンゲンの詩人に考えを吹き込んで、グンテルは敵の最も立派な人物ディエトリーヒによって、しかもあらすじの頂点でようやく打ち負けるということになったのである。そのように今やブレーデルはグンテルを捕えるという偉業を失ったばかりか、最初の戦いですぐさまダンクワルトに倒されてしまうこととなったのであり、戦いの中の最後を飾るのは、ディエトリーヒがグンテルとハゲネを捕えるということとなったのである。これは大きな大胆な改作の一つであると言えよう。

このような改作には、新しい創作人物ダンクワルトへの配慮、ブルゴント族の名誉への配慮、グンテル王への配慮、そしてフン族の価値低下といったいくつかの文学的衝動が絡み合っているわけであるが、しかし、この独自の入れ替えは、8人の伝承された英雄の死の「順序」が前段階と「同じ」である（脚註16と17参照）ということを妨げはしなかった。ただ唯一の例外が、国王ゲールノートがフォルケールに先行しているということだけであるが、これはゲールノートがリュエデゲールによって倒れ、その死がしっかりした位置を持っているからである。順序が高まりとして構成されているということは注目すべきであり、ニーベルンゲンの詩人は前段階のそれを尊重すべき術を心得ていたのである。

上記のような経過をたどっている個々の戦いは全く新しい外観を得たわけであるが、そのために貢献したのが、ディエトリーヒが違ったふうに干渉しているということであろう。この人物は『ニーベルンゲンの歌』ではさらに結末においても重要な改作を施されている。前段階においてはこのディエトリーヒが最後の場面で王妃クリエムヒルトを真っ二つに斬るのであったが、このことにニーベルンゲンの詩人は耐えられなかった。そこでその代役を担う最も適切な人物として、粗野な地位の性格を保持しているヒルデブラントが選ばれたのであったが、そのことでもってディエトリーヒは立派で中庸の騎士に精練されているとも言えるのである。

以上のように、ホイスラーは『ニーベルンゲンの歌』の最終段階における主な改作点を指摘しているのであるが、結局のところニーベルンゲンの詩人の業績としては、ホイスラーがまとめてもいるように、次の6点に要約することができよう。

①詩人は二つの伝説を「一つの」作品として結びつけた。
②そのために大きい方の原拠（後編）の詩形を用いて、全体にわたって統一的な詩形を施した。
③両部を内部的にもお互い均衡をもたせるようにした。
④風俗描写や精神生活においても、全体を宮廷的な趣味に合わせて、洗練されたものとした。
⑤さらに言語や詩句においても時代の要求に合うようにした。
⑥最後に物語を拡大し、豊富にし、しかも両部を同じ分量にして釣り合いをもたせた。

上記の①から③まで、また④と⑤はともによく似ているので、とどのつまり最後の詩人の業績は、1）二つの伝説を結びつけ一つにした、2）内容と形式をより宮廷的なものに洗練させた、3）

多くのものを付け加えていった、という3点に簡単化することもできるのである。

結　び

以上、北欧のニーベルンゲン伝承を整理したあと、ホイスラーの発展段階説に基づいて『ニーベルンゲンの歌』の生成過程を辿ってきたが、これらの考察から今や明らかなことは、『ニーベルンゲンの歌』においてはもはやブリュンヒルトではなく、クリエムヒルトが中心人物として重要な役割を演じているということである。素材の片方の枝であるブリュンヒルト伝説においてもそれは明らかである。冒頭において語られている「クリエムヒルトの鷹の夢」はなるほど前段階においてすでに語られていたものと推定されるが、しかし、それはまだブリュンヒルト伝説の枠内にとどまったままであり復讐については触れられていなかった。ニーベルンゲンの詩人はその「鷹の夢」を踏襲してクリエムヒルトを中心人物としたばかりか、さらにその中に夫のための復讐を盛り込むことによって前編と後編とを結びつけることに成功したのである。全体が夫のための復讐となったため、その夫ジーフリトもその生い立ち等の点で改作を施されねばならない。そこで今やジーフリトはニーベルンゲンの詩人によって、上でも述べてきたように、宮廷ザンテンの騎士的王子として登場することとなったのである。かつてニーベルンゲンの財宝を獲得し、また竜を退治して肌が不死身の甲羅と化したという前段階までのジーフリト像は、ハゲネの語りの中でしか語られていない。クリエムヒルトとの結婚も前段階のようにただちには実現しないで、長い間彼はミンネを求めて悩み努める中世の騎士である。ついに果たした結婚後も、ジーフリトは前段階のようにそのままウォルムスにとどまるのではなく、一旦故国へと帰って、父のあとを継いで王位につくのである。これによってブリュンヒルトによる招待が必要となるのであるが、ブリュンヒルトは今やこの招待とそのあとの口論のために登場しているに過ぎない。ジーフリト暗殺はブリュンヒルトの侮辱をきっかけとして今やハゲネの陰謀によって企てられてゆくのであり、これは夫のための復讐という全体の構成にも役立っている。今やジーフリトの死は、かつてのブリュンヒルトの悲劇ではなく、クリエムヒルトの復讐のためのものである。ジーフリトの死もこまかく描かれていて、クリエムヒルトの悲しみも細叙されている。『ニーベルンゲンの歌』の改作の多くはこの目的に向かって作用していると言ってもよいであろう。

素材のもう一つの枝であるブルグント伝説においても、クリエムヒルトが中心になっていることは明らかである。前段階では簡単に語られていたと推測されるエッツェルとの再婚の場面についても、クリエムヒルトの苦悩が細叙されて拡大されている。その際重要な役割を演じているのがリュエデゲールである。このリュエデゲールは前段階『古きニーベルンゲン災厄』ではまだエッツェルの仲人ではなかった。上で見てきたように、王弟ブレーデルがその役を持っていたと推定されるが、『ニーベルンゲンの歌』ではこのリュエデゲールがエッツェル王の求婚の使者となり、しかも誠実な誓いを立てることによってクリエムヒルトとの新たな結びつきが生まれてくるのである。このリュエデゲールとクリエムヒルトとの誠実関係は、ニーベルンゲンの詩人独自

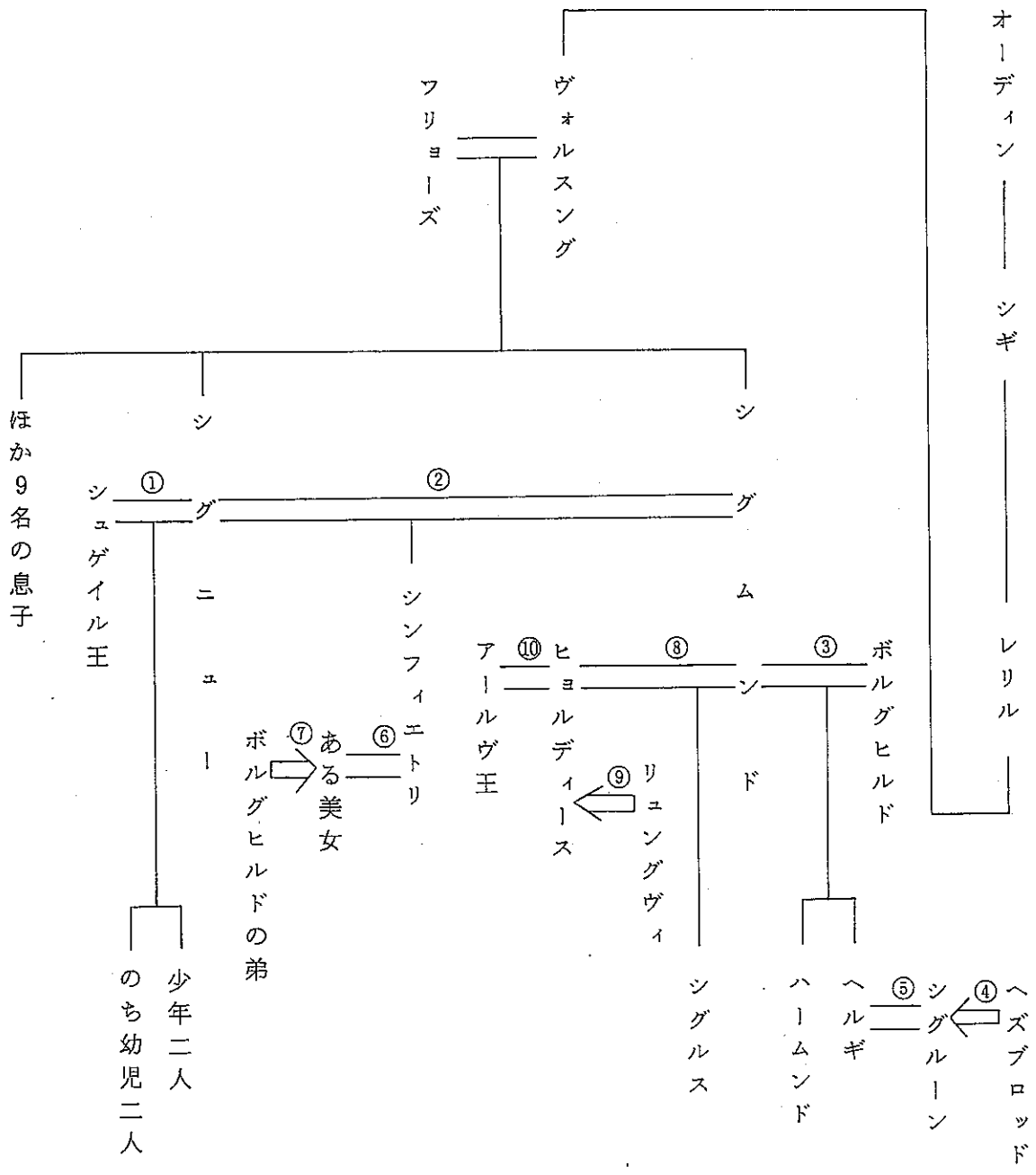
の意味深長な創作部分であり、これが素材に由来するということはほとんどないと言ってよいであろう。この誓いによってクリエムヒルトはエッツェル王との再婚を決意するのであるが、それはとにかくジーフリトの復讐のためである。そしてその企てを実行に移すのが、13年後の招待である。第二段階以来、クリエムヒルトには「財宝への執着」と「夫のための復讐」という二つの衝動があって、この二つがいわば競い合っていたわけであるが、この『ニーベルンゲンの歌』では愛しいジーフリトのために復讐するということの方に重きが置かれることとなったのである。この愛のための復讐が中心話題となることによって、ジーフリトの殺害者であるハゲネも目立つ結果となるのは当然である。ニーベルンゲン的忠誠がもう一つのテーマとなるのである。ブルグント族たちがかつての主人公の役割を取り戻すのである。このニーベルンゲン的忠誠とクリエムヒルトの亡き夫に対する誠実な愛とが衝突し、激しい対立を繰り返しながら悲劇が高まってゆくところにこの作品の特質があるわけであるが、これについては次稿において詳しく論ずる予定である。

それはともかく、以上のようにニーベルンゲンの詩人によって施された改作点を振り返って『ニーベルンゲンの歌』全体の構成に注目してみよう。ニーベルンゲンの詩人の改作によって全体のあらすじが前編と後編で釣り合うように構成されたのである。『ニーベルンゲンの歌』は、すなわち、前編と後編とがともに結婚と招待という出来事から成り立ち、しかもそれらはいずれも十数年という時間によって隔てられていることがわかる。北はニーベルンゲンの国及びイースラントから南はフン族の国に至まできわめて広範囲な空間が物語の舞台となっている『ニーベルンゲンの歌』において、あらゆる人物たちは前編では二度にわたってライン河畔のウォルムスに集結し、後編では同じく二度にわたってドーナウ河畔のエッツェルンブルクへと集合するのである。ウォルムスとエッツェルンブルクとを拠点とした結婚と招待の旅を軸にして、前編と後編とが均整のとれた二重構造を有していることが明らかである。上で触れる機会のなかったジーフリトの募兵の旅を含めて、全体を図式化するとすれば、巻末の図式Ⅳのようにまとめることができるであろう。『ヴォルスンガ・サガ』や『ティードレクス・サガ』では、構成の点で粗雑な傾向があり、単に素材を結び合わせただけという観があったが、『ニーベルンゲンの歌』では全体が有機的な関連を有しつつ、しかも前編と後編とが対を成して構成されているのである。このような構成を詩人はクリエムヒルトという人物を中心に置くことによって成し遂げることができたのであり、『ニーベルンゲンの歌』の詩人はここにおいて初めて二つの素材を発展的に統一することに成功したのである。

＊本研究は昭和63年度文部省科学研究費（奨励研究A）交付による研究成果の前半部分である。
なお、研究成果の後半部分は、――『ニーベルンゲンの歌』とハルトマンのアルトゥース・ロマーン――と題して本紀要次巻に掲載の予定である。

図式Ⅰ　ヴォルスング一族の系譜

（『ヴォルスンガ・サガ』による）

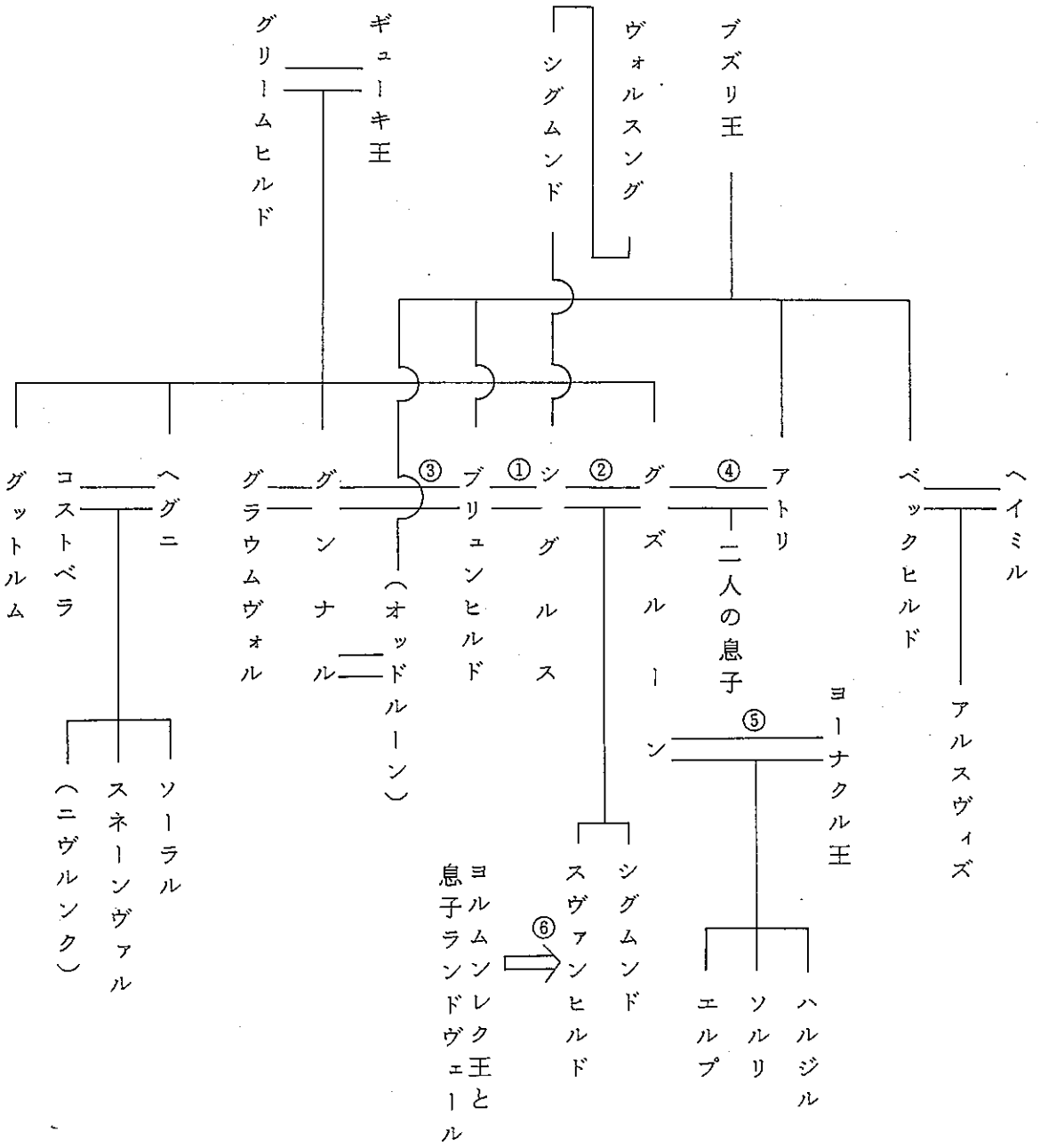


＊番号は結婚の順番を表わす（ただし、②は近親相姦、④⑦⑨は求婚のみ）

図式Ⅱ

ギューキー族とグズルーンの系譜

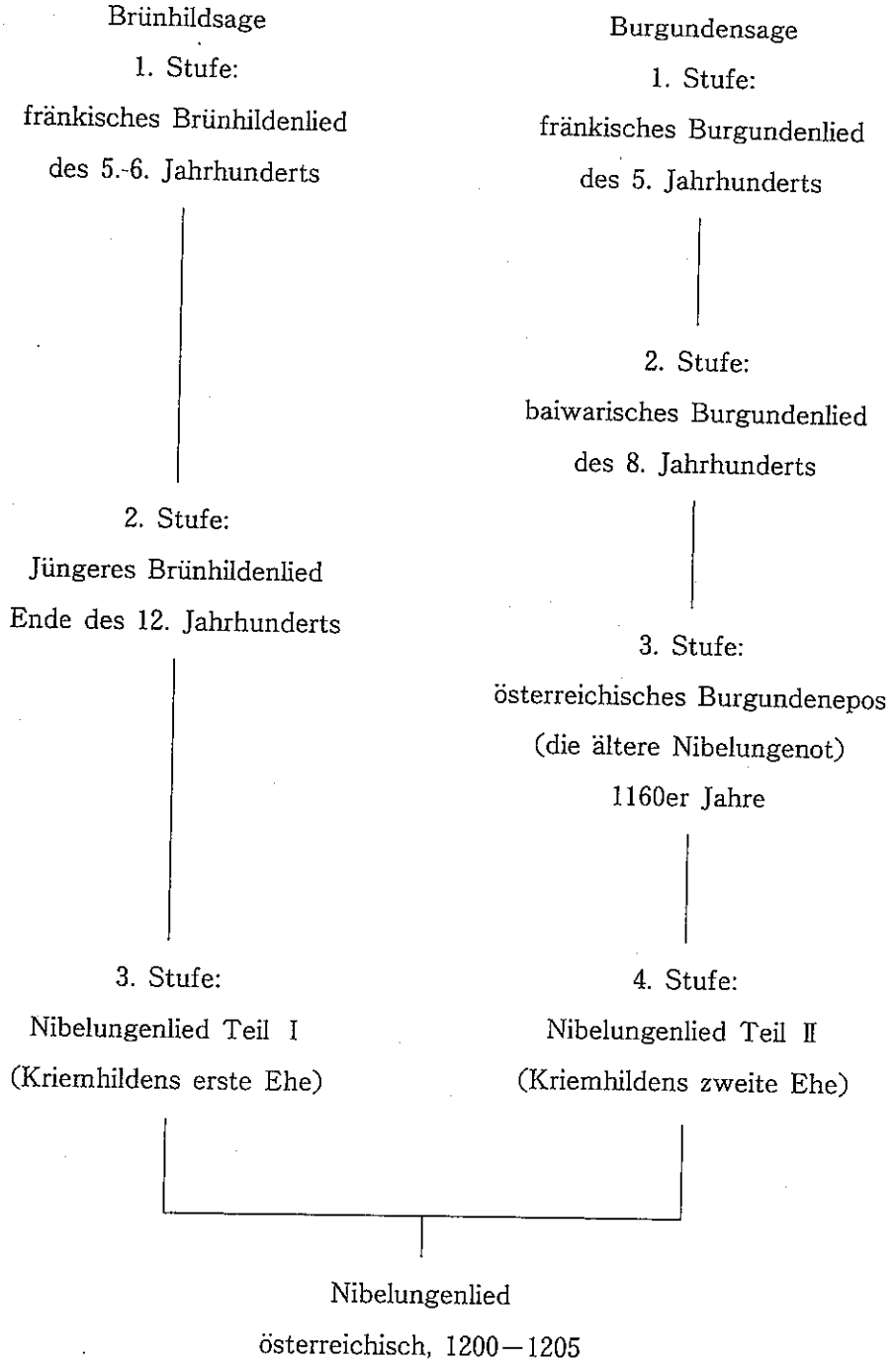
（『ヴォルスンガ・サガ』による）



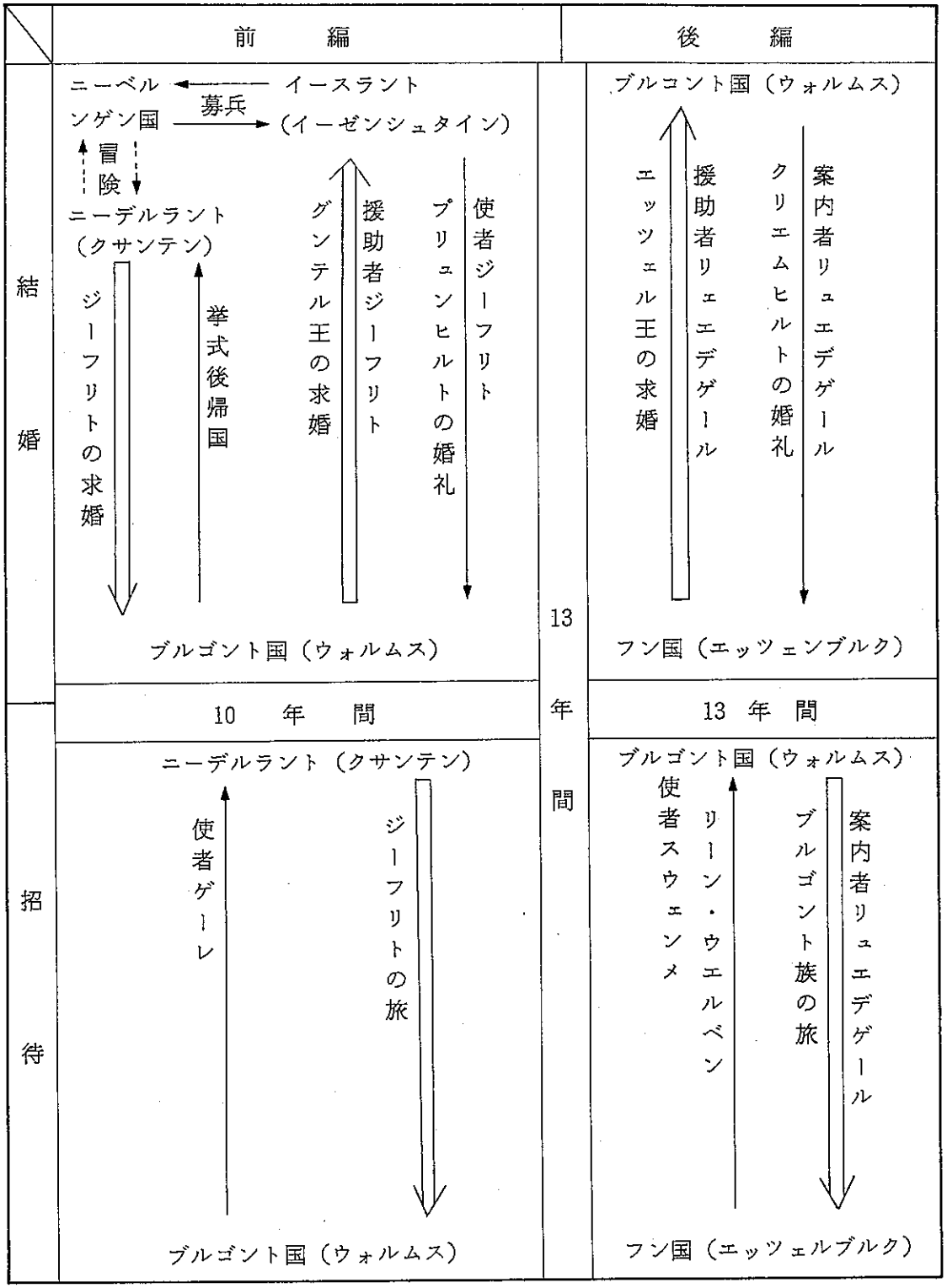
＊番号は結婚の順番を表わす（ただし、①は婚約、⑥は求婚のみ）
なお、グンナルとオッドルーンは恋人関係を表わす

図式Ⅲ　ホイスラーによる『ニーベルンゲンの歌』の生成過程

(Stammbaum des Nibelungenlieds)



図式Ⅳ 『ニーベルンゲンの歌』における旅と空間



＊ ⇨ は求婚及び招待の旅、 ⟶ はそれ以外の旅を表わす
なお、点線はハゲネの語りの中の旅を表わす